

多賀城市文化財調査報告書第74集

市川橋遺跡

—第34・35・37・38次調査報告書—

平成16年3月

多賀城市教育委員会

序 文

私たちの住む多賀城市の先人は、悠久な時の流れに乗り、恵まれた環境に育まれながら豊かな歴史や文化を築いてきました。本市には、国の特別史跡に指定されている多賀城跡や多賀城廃寺跡のほか多くの文化財が存在し、こうした文化遺産を保存活用して、多賀城の長い歴史を後世に継承していくことは私たちの重要な責務の一つと考えております。このため、文化財行政を所管する教育委員会としても、国民の共有財産である遺跡の保護と開発の調和には細心の注意を払いながら対処してまいりました。

さて、近年、本書にも収録しておりますように、建物の基礎工事にパイルを打つ工法による住宅建設が急増してきており、これに対応した発掘調査の方法・体制が求められてきています。教育委員会としても、今後、地下構造に配慮しながら最善の方策で取り組んでいきたいと考えています。

本書には、平成15年度に国庫補助事業として実施した市川橋遺跡の調査成果を4件収録しています。いずれも調査面積は小規模なものですが「古代都市多賀城」の姿を復元するうえで貴重な資料を提供しました。

本書に掲載した調査成果が今後の文化財の保護と歴史研究の一助となることができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで、多くの方々からご指導、ご協力をいただきましたことに対して、心より感謝申し上げます。

平成16年3月

多賀城市教育委員会
教育長 櫻井 茂男

例　　言

- 1 本書は、平成15年度の国庫補助事業として実施した市川橋遺跡第34・35・37・38次調査の成果をまとめたものである。
- 2 各調査における遺構の名称は、第1次調査からの一連番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書中の各調査区で使用した座標値は、過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、各調査区の基準線については、X : -189,200, Y : 13,850 (南北・東西大路交差点の中央付近) の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに、東西方向は東にE 1・E 2・・・、西にW 1・W 2・・・、南北方向は北にN 1・N 2・・・、南にS 1・S 2・・・と表示している。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『測量標準土色帖』(小川・竹原:1996)を使用した。
- 6 本書の執筆は、I・IIを島田敏、IIIを村松登、IVを武田健市、Vを相澤清利、VIを廣瀬理子が担当し、編集は担当者全員が行った。また、遺物整理については、臨時職員の伊藤美恵子、内海由美子、浦原志恵子、遠藤友美、小野寺雪子、鹿野智子、熊谷純子、今野妙子、坂本英美、中村千恵子、村上和恵、横山佳織、渡辺奈緒の協力を得た。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I 遺跡の地理的・歴史的環境	1
II 市川橋遺跡第34次調査	2
III 市川橋遺跡第35次調査	8
IV 市川橋遺跡第37次調査	17
V 市川橋遺跡第38次調査	39
VI 市川橋遺跡第37・38次調査出土木簡について	

調　　査　要　項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 高倉敏明
- 3 調査概要

調査次数	所在地	調査面積	調査期間	調査担当者
第34次	市川字通ノ池23・24の各1部	15 m ²	平成15年4月8日～3月2日	島田 敏、相澤正信
第35次	市川字通ノ池36、公共用地の各1部	56 m ²	平成15年4月9日～4月25日	村松 登、文原 充
第37次	市川字通ノ池36の2	60 m ²	平成15年6月23日～7月29日	武田健市
第38次	市川字通ノ池18・34・35	24 m ²	平成15年6月24日～8月4日	相澤正信、文原 充

- 4 調査協力者 伊勢博之 伊勢泰子 寺沢久 繩辺 朗 渡辺匡子 波多野創代 渡辺智樹 渡辺由美
大場万太郎 スモリ工業(株) (株)一条工務店 住友林業(株) (株) 北洲ハウジング
多賀城市城南土地地区面整理組合 大木建設(株)
- 5 調査参加者 赤間ひづ子 浅野喜久 男 浅野 忠 戸野しづ子 速藤実 速藤一代 及川光江 大友良子
大場勝喜 大山貞子 小笠原マキ子 小野寺恵子 小幡 武 後藤恵子 今野和子 塩井一征
鈴木太仲 鈴木寿二 高橋宣子 武山あや子 平山節子 廣瀬祐司 藤田恵子 宮川ハルミ
宮下喜代 平 山下裕子 渡辺幹子

凡　　例

本書中で使用する遺構略称、遺物分類については、以下のとおりである。

1. 遺構略称

S X : 道路、河川及び性格不明な遺構 SD : 溝 SK : 土壙 Pit : 柱穴及び小穴

2. 遺物分類

1) 土師器杯

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

B I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

3) 須恵器甕

I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

4) 瓦の分類

「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1983) の分類基準に従った。

3. 本文中で記載する「灰白色火山灰」については、その起源を宮城県北西部に求める説（山田・庄子：1980）と十和田・火山灰と同一とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、近年は後者の説が有力である。この火山灰の降下年代については、年輪年代測定で907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年（934）閏正月15日に旋失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える立場（多賀城跡調査研究所：1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日にある「出羽国言上雨灰高二寸諸御桑枯損之由」の記事に結びつけ、10世紀前葉とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、本書では考古学的な見解を重視し前者に従った。

I. 遺跡の地理的・歴史的環境



第1図 市川橋遺跡の位置と周辺の遺跡

市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の南側及び西側に位置し、多賀城跡が所在する低丘陵と砂押川に挟まれた標高2~3mの沖積地に立地している。その範囲は、東西1,400m、南北1,600mに及び、総面積は約703,000m²の広大な遺跡である。

本遺跡は、旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡として登録されているが、奈良・平安時代を通して陸奥国守が置かれた多賀城と密接な関係を持つ古代の遺跡として知られている。

周辺の遺跡についてみると、東側の丘陵部には多賀城の附属寺院である多賀城廃寺があり、それを取り巻くように古代の集落跡が広く展開する高崎遺跡が所在する。多賀城と廃寺の中間の小丘陵には館前遺跡（特別史跡多賀城跡に追加指定）があり、国司館と考えられている。また、本遺跡西側には東西方向に微高地が続いており、山王遺跡と新田遺跡が連続して立地している。両遺跡とも大規模な複合遺跡であり、山王遺跡では弥生時代から近世にかけて、新田遺跡では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されている。

本遺跡においては、これまで数多くの発掘調査が実施され多大な成果が得られているが、その中最も注目されるのは多賀城南面に施工された古代の方格地割りの発見である。これは南北大路、東西大路と呼んでいる二つの主要道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておおよそ1町四方の区画がなされ、まち並みが形成されたものである。その範囲は、東西約1,100m、南北750m以上に及び、本遺跡から山王遺跡にかけての地域に広がっている。さらに、東西大路の延長部分は新田遺跡の北東部でも検出されている。このまち並みについては、古代地方都市と位置付けられており、内部及び周辺からは上級官人の邸宅などを構成する掘立柱建物跡や井戸跡、河川やそれに架かる橋（橋脚）、さらに水田跡や畠跡などの多数の遺構が発見されている。

II 市川橋遺跡第34次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理事業地内における個人住宅建設に伴うものである。当該地周辺では、近年区画整理事業や道路建設等に伴う大規模な発掘調査が実施され、古代地方都市に関わる多数の遺構、遺物が発見されている。

今回の建設工事は、基礎工法に直径60cm、長さ6.5mの钢管杭を37本打ち込み、いわゆるパイレ工法を採用するため、地下遺構への影響が懸念された。そのため、発掘調査実施の協力を地権者に求め、平成15年4月3日に承諾書及び依頼書の提出を受けたことから、事前調査として発掘調査を実施するに至った。

当該地は、区画整理事業に伴う宅地造成の際に約1.2mの厚さで盛土されていたため、現地表面から遺構面までは相当な深さがあり、調査区の掘削に伴い大量の排土が出ることが予想された。よって、排土場所の確保と隣接住宅や道路に対して地盤沈下等の影響が生じないよう配慮したことから、調査区の設定にあたっては面積を制約せざるを得なかった。

調査は4月8日から開始し、はじめに重機により盛土及び堆積土の除去を行った。その結果、現地表面から約1.5~1.7m下で最初の遺構面(III・V層上面)を検出した。4月11日に遺構検出状況を写真撮影し、その後溝跡等の遺構の掘り込みを実施する。これと併せて1/20の縮尺で平面図作成も開始する。なお、本調査における発掘基準線とその表示は、城南土地区画整理事業に伴う各調査と共通とした。調査は、III・IV層の除去及び検出した掘立柱建物跡や溝跡の掘り込みを行い、その状況の写真撮影、実測図作成を行う(4月16日)。次に、V層の除去を行い、VI・VII層(地山)上面で小溝群を検出する。これらは、東西方向から南北方向への変遷が確認できたことから、新しい時期のものから順に掘り込み、実測図作成を行う(4月24日)。発掘作業は4月25~29日の中断期間を挟み、5月2日に調査区各壁の土層堆積状況の断面図作成を行い、調査を終了する。

2. 調査成果

(1) 基本層序

Ia層 区画整理事業に伴う盛土層で、層厚は約1.2m。

Ib層 現代の水田耕作土層で、層厚は10~15cm。

Ic層 現代の水田の底土層で、層厚は10~15cm。

IIa層 黒色シルト(2.5Y2/1)で層厚は約5cmと薄く、調査区の南西部には認められない。古代の土器片



第1図 調査区位置図

を含む。

IIb 層 黄灰色シルト(2.5Y4/1)で層厚は10~15cm。調査区全域にはほぼ水平に堆積する。古代の土器片を含む。

III 層 黒褐色シルト(2.5Y3/1)で層厚は5~15cm。調査区北半部に堆積する。上位に灰白色火山灰を斑状に含む。また、須恵系土器を含む古代の土器片を多く含む。SD3011溝跡の検出面。

IVa 層 黒色シルト(2.5Y2/1)で層厚は約3cmと薄い。木炭を多く含む。

IVb 層 黄灰色シルト(2.5Y4/1)で層厚は5~10cm。III層とほぼ同じ位置に堆積する。木炭粒を多く含む。また、古代の土器片を含む。SB3010建物跡の検出面。

V 層 暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)で層厚は10~20cm。調査区の全域に堆積する。古代の土器片を若干含む。SD3012溝跡等の検出面。

VI 層 にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)で層厚は5~10cm。調査区の北半部に認められるVII層に類似するが混入土が多い。小溝群の検出面。

VII 層 にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)古代の最終遺構検出面と考えられる。小溝群の検出面。

(2) 発見遺構と遺物

SB3010掘立柱建物跡（第2図）

調査区西半部において3基（P13~15）の柱穴を検出しただけであるが、その配置から建物跡の北東隅にあたると考えられる。調査区西壁の土層観察から、堆積土のIVb層上面から掘り込まれていることがわかる。また、SD3012溝跡と重複し、これより新しい。方向は、東側柱列でみると北で約1度東に偏している。規模は、北側柱列で柱間が約2.4m、東側柱列で約1.8mである。柱穴の平面形はおよそ方形で、一边は45~60cmである。深さは、調査区西壁にかかるP13の断面観察では45cmである。北東隅のP14では、柱の抜取穴を確認している。柱穴埋土は黒褐色シルト(2.5Y3/1)を主体とし、掘り方にはにぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)が斑状に多く含まれる。

遺物は、土器器杯・甕（B類）、須恵器杯、土器片製円盤（第3図12・13）が出土している。

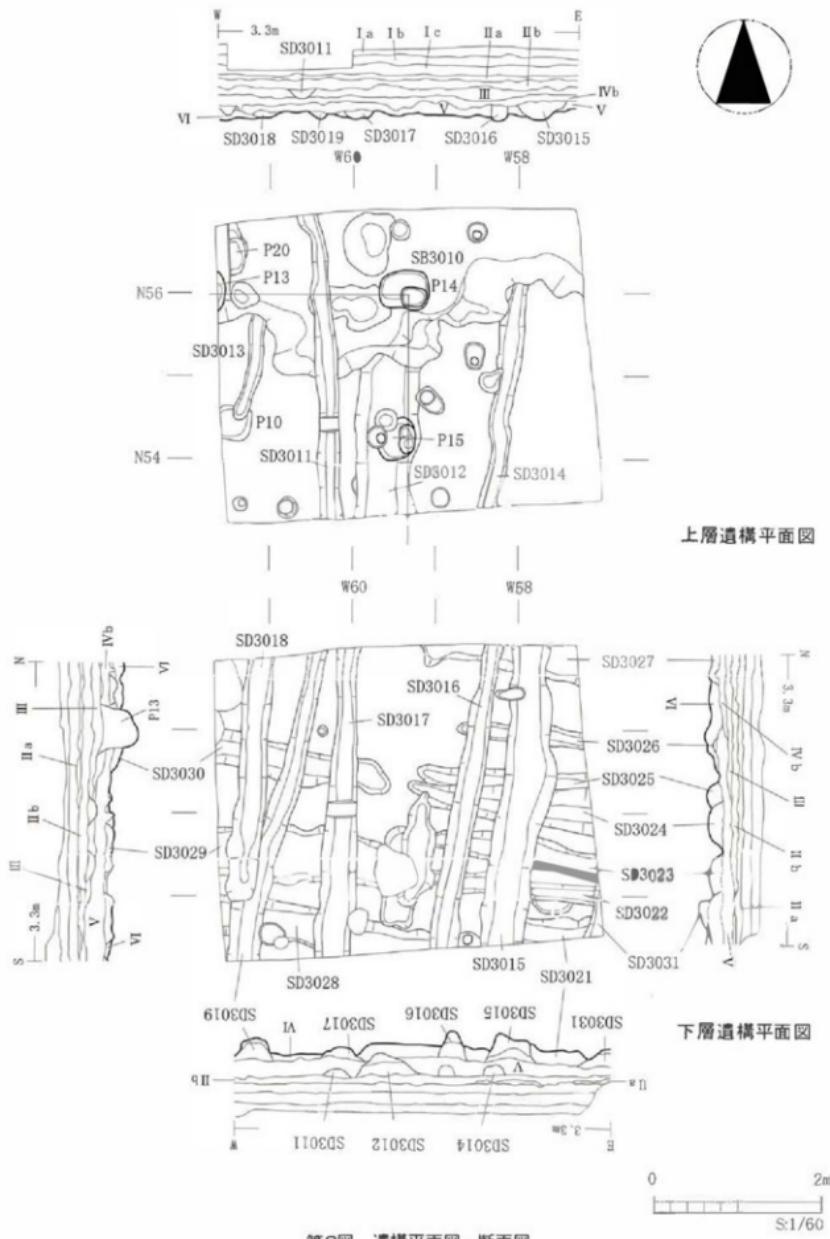
SD3011溝跡（第2図）

調査区西半部のIII層上面で検出した南北方向の溝跡である。北壁から南壁にかけて約3.7m検出し、さらに調査区外へ延びている。方向は、北で約3度西に偏している。規模は、上幅18~28cm、下幅6~14cm、深さ約12cmである。底面は舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色シルト(2.5Y3/1)の単層で木炭粒を多く含んでいる。

遺物は、土器器杯（BII類・BV類、第3図1）、高台付杯・甕（B類）、須恵器瓶・甕が出土している。

SD3012溝跡（第2図）

調査区中央部のV層上面で検出した南北方向の溝跡である。北側がIII・IV層に覆われ、重複関係からSB3010建物跡より古い。確認できた長さは約2.4mで、南側はさらに調査区外に延びている。方向は、北で約2度東に偏している。規模は、上幅62~75cm、下幅33~42cm、深さ約30cmである。底面は舟底状を呈し、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、いずれも黒褐色シルト(2.5Y3/1)であるが、下層にはにぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)が斑状に含まれる。



第2図 遺構平面図・断面図

遺物は、土師器杯（BⅤ類）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（V類、第3図2）・瓶・甕、砥石が出土している。

S D3013溝跡（第2図）

調査区西半部のV層上面で検出した南北方向の小規模な溝跡である。調査区内で確認できた長さは約1.3mである。方向は、北で約7度東に偏している。規模は、上幅14~20cm、下幅8~12cm、深さ約7cmである。底面は舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黄灰色シルト（2.5Y4/1）の単層で、木炭粒を含んでいる。

遺物は、土師器杯（BⅤ類）・甕（B類）が出土している。

S D3014溝跡（第2図）

調査区東半部のV層上面で検出した南北方向の溝跡である。調査区内で確認できた長さは約2.7mである。方向は、北で約9度東に偏している。規模は、上幅22~30cm、下幅10~16cm、深さ約12cmである。底面は舟底状を呈し、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト（2.5Y3/1）の単層で、にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）を斑状に含んでいる。

遺物は、土師器杯（BⅡ類）・甕（B類）、須恵器杯・瓶・甕が出土している。

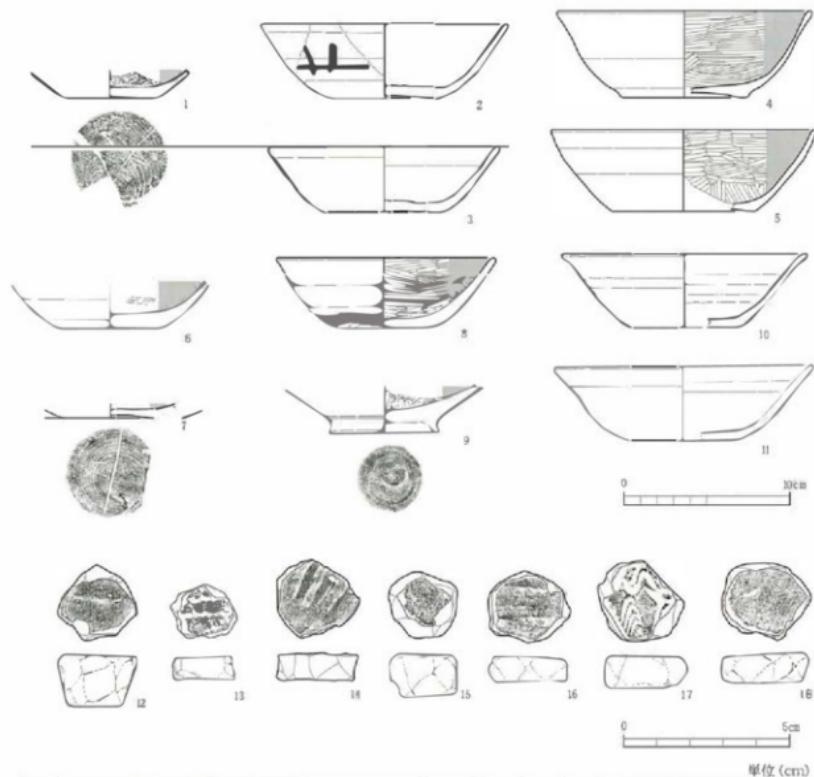
S D3015~3031小溝群（第2図）

調査区全域で検出した小規模な溝跡のまとまりである。すべてV層掘り下げ後のVI・VII層上面で検出した。南北方向のものと、東西方向のものの2つのグループに分けられ、前者は7条、後者は10条検出した。これらは重複関係から、南北方向のものがすべて新しい。さらに、グループ内でも重複があることから、それぞれ最低2時期の変遷があることがうかがえる。前者については、調査区内で確認できる長さは2.9~3.8mで、大部分の溝跡が北と南の両側でさらに調査区外に延びている。方向は、北で4~10度東に偏している。規模は、上幅35~60cm、下幅15~35cm、深さ20~30cmの数値内に収まる。一方、後者については、確認できる長さは1.7~3.1mで、調査区中央付近で溝の端部がみられるものが多い。方向は、東で5~10度南に偏している。規模は、上幅20~40cmまたは40~60cm、下幅8~20cmまたは15~55cmの2つの数値内におおむね収まる。深さはいずれも10cm前後である。両グループとも底面に凹凸があるものが多く、壁は緩やかに立ち上がるが、南北方向のものに比較的急な立ち上がりをみせるものがある。埋土は黄灰色シルト（2.5Y4/1）の単層が多く、にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

遺物は、土師器杯（B類）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（I類・III類）・甕が出土している。しかし、すべて小碎片であり出土量も少ないため、グループごとの傾向や特徴を導き出すことはできない。

3 まとめ

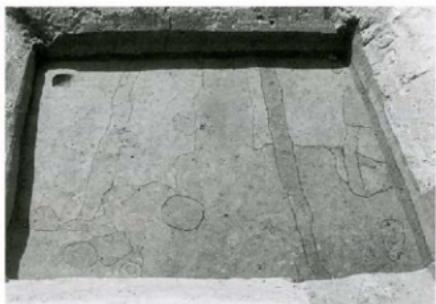
今回の調査で発見された各遺構の年代については、S D3011溝跡以外はすべてIII層に覆われていることから、灰白色火山灰の降下以前の時期、すなわち10世紀前葉以前とすることができる。これは須恵系土器が、III層中には含まれるが、各遺構からは出土していないこととも矛盾しない。また上限年代については、一番古い小溝群のいずれにも、非ロクロ調整の土師器（A類）が見られないことから、大きく捉えて8世紀末頃と考えられる。したがって、S D3011溝跡以外の各遺構は、この間の変遷と理解される。



単位(cm)

番号	種類	遺構・位置	特徴			口径	底径	高さ	基部	写真図版	壁脚番号	備考
			外面	裏面	内面							
1	土師器・杯	SD 3011 1 層	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ヘラガキ ・温色處理	—	6.0 19/24	—	—	—	R 11	底面に「X」のヘラガキ	
2	須恵器・杯	SD 3012 1 層	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ロクロナデ	(15.8) 19/24	(6.6) 19/24	4.6	1-5	R 1	体側に墨書き		
3	須恵器・杯	P 20	ロクロナデ 造形: ヘラ切引	ロクロナデ	(14.1) 19/24	(7.5) 19/24	4.0	—	R 5			
4	土師器・杯	P 10	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ヘラガキ ・温色處理	(15.4) 6/24	(7.7) 13/24	5.3	1-6	R 2			
5	土師器・杯	P 10	ロクロナデ 造形: 不明	ヘラガキ ・温色處理	(16.0) 7/24	(8.6) 7/24	5.0	—	R 3			
6	土師器・杯	III 層	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ヘラガキ ・温色處理	—	6.4 24/24	—	—	R 7			
7	土師器・杯	III 層	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ヘラガキ ・温色處理	—	5.5 19/24	—	1-7	R 8	底面に「—」のヘラガキ		
8	土師器・杯	III 层	ロクロナデ 瓶～体 部: 手斧ヘラケズリ	ヘラガキ ・温色處理	13.8 16/24	6.2 24/24	4.3	—	R 6			
9	土師器・ 瓶台付杯	III 层	ロクロナデ 造形: 不明	ヘラガキ ・温色處理	—	6.6 18/24	—	1-4	R 9	底面に「X」のヘラガキ		
10	須恵器・杯	III 层	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ロクロナデ	(14.8) 6/24	(6.1) 8/24	4.5	—	R 10			
11	須恵器・杯	II 层	ロクロナデ 造形: 目輪み切引	ロクロナデ	(15.5) 10/24	(6.9) 10/24	4.5	—	R 12			
12	土師片割内盤 (須恵器・ 便器用) P 14出土	13	上部片割内盤 (温色 ・便器用)	P 14出土	14	上部片割内盤 (須恵器・ 便器用)	V出土	—	15	上部片割内盤 (須恵器・ 便器用)	三層出土	
16	土師片割内盤 (須恵器・ 便器用) II層出土	17	土師片割内盤 (須恵器・ 便器用)	II層出土	18	土師片割内盤 (須恵器・ 便器用)	E層出土	—				

第3図 出土遺物



1 上層遺構検出状況 北より



2 上層遺構完掘状況 北より



3 下層遺構検出状況 北より



4 下層遺構完掘状況 北より



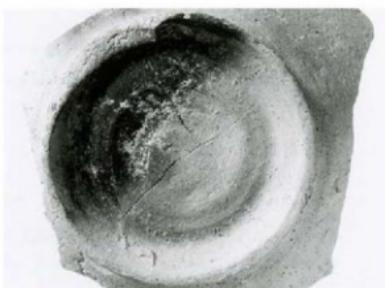
5 SD3012・1層出土 墓書土器 須恵器・杯
(第3図2 R1 S:任意)



6 P10出土 土師器・杯(第3図4 R2 S:1/2)



7 III層出土 ヘラ描き土器 土師器・杯
(第3図7 R8 S:任意)



8 III層出土 ヘラ描き土器 土師器・高台付杯
(第3図9 R9 S:任意)

III 市川橋遺跡第35次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理地内の個人住宅建設に伴うものである。当該地区周辺では、近年区画整理に伴う大規模な発掘調査が実施され、古代地方都市に関わる遺構・遺物が多数発見されている。

今回の建設工事は、基礎工法に細い鋼管を打ち込むいわゆるペイル工法をとることから、埋蔵文化財に影響を及ぼすことが考えられた。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、結論としてペイル工法となった。これを受け地権者から2月17日付で発掘調査の依頼があった。4月9日から現地において重機による表土除去を行なうとともに、随時写真撮影を行なう。4月15日にはS X3072とS X3074河川跡を発見した。これらの遺構を完掘することは土砂崩落の危険を伴うため行なわなかつた。同時に、実測図作成のための基準坑を設置し平面図と断面図の作成を行なった。4月23日には重機でS X3074河川跡の一部を掘り下げ、断面の写真撮影を行なった後、埋め戻しと器材の撤収を行なって一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 基本層序

- I a 層 区画整理に伴う盛土層で層厚約1.2m。
- I b 層 現代の水田耕作土層で層厚25~40cm。
- II 層 黒褐色シルト(2.5Y3/1)層で層厚3~12cm。
- III 層 調査区の西端部に堆積する黄灰色砂質土(2/5Y4/1)層で層厚7~18cm。灰白色火山灰をプロック状に含む。
- IV 層 黄灰色砂(2.5Y4/1)層で層厚3~20cm。炭化物を少量含む。
- V 層 調査区の西半部に堆積する暗灰黄色砂(2/5Y5/2)層で層厚3~21cm。炭化物を少量含む。

(2) 発見遺構と遺物

S X3072 (第2・4図)

調査区の西半部で検出した西へ向かって傾斜する落ち込みである。西側へ抜がっているため、全体は把握できなかつた。S X3074河川跡と重複がありこれより新しい。平面形は不整形であり、検出した規模は東西1.5~5.3m、深さは63~89cmである。底面は概ね平坦であり、壁の立ち上がりは北側ほど急で、南側

ほど緩い。埋土は1層で、砂の粒子が粗い黄褐色砂である。なお、この遺構の北側隣接地には第26次調査のA44区で発見したSX2079がある。SX2079は南北大路を横断する河川に架かるSX1777橋跡の南東側にあり、東に向かって落ち込んでいる。灰白色火山灰をブロック状に含む層に覆われ、またSD2080溝跡と重複がありこれより新しい。このSX2079と今回発見したSX3072の位置関係や、埋土および平面形のあり方が極めて類似していることから、これらは同一の遺構と考えられる。

遺物は土師器杯（BV類）・甕（B類）、須恵器壺が出土している。

SX3074河川跡（第2・3・4図）

調査区の全面で河川埋土を確認しており、平面形は確認できなかった。底面まで掘り下げはしていないが、断面観察により東に向かって落ち込む堆積状況が確認できた。SX3072と重複関係がありこれより古い。確認した埋土は2層に分けられ、1層は黄褐色砂、2層はオリーブ褐色砂である。

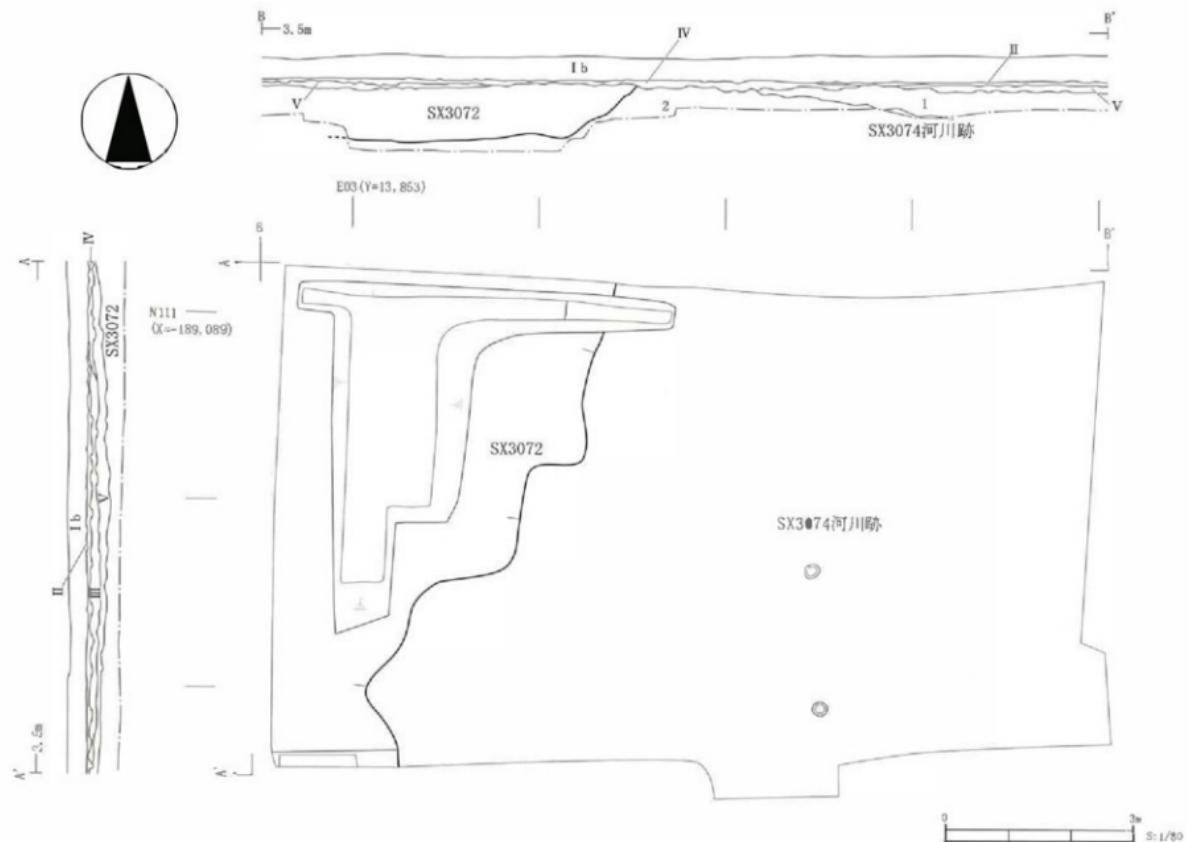
遺物は1層より土師器杯（BI類・BV類）・甕（B類）、須恵器杯・甕が出土している。

3.まとめ

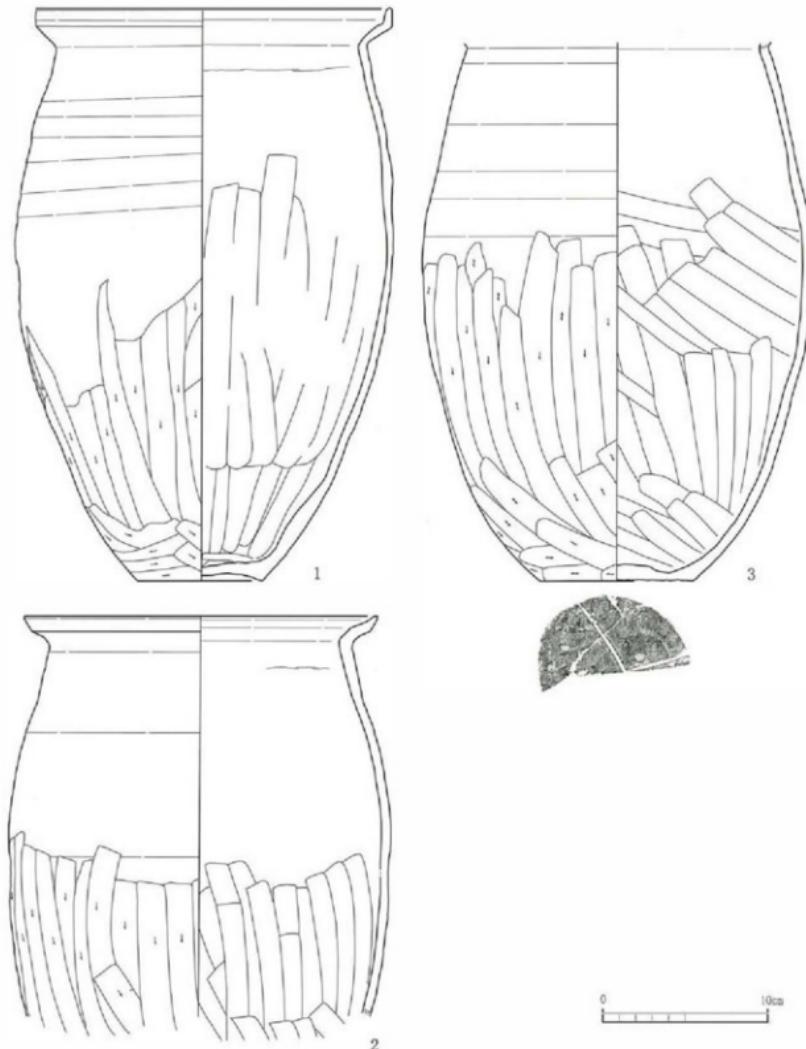
第35次調査では、南北大路を横断する河川に架けられた橋の南東側隣接地を調査した。その結果、SX3074河川跡とそれより新しい落ち込みであるSX3072を発見した。以下、これらの遺構の年代と性格について考えてみる。

SX3074河川跡の年代については、底面まで掘り下げることができなかつたため、上限の年代を検討する資料が得られなかつた。しかし、堆積層との関係や遺構の重複関係を見ると、SX3074河川跡は灰白色火山灰を含むⅢ層に覆われるSX3072より古いくことや、1層から土師器甕（B類）が出土することから、9世紀を年代の下限と考えておきたい。一方、SX3072の年代については、この遺構がSX3074河川跡より新しくまたⅢ層に覆われる。このことは、SX3072から出土した遺物の特徴がおよそ9世紀代におさまることや、須恵系土器が出土してないことと矛盾しない。したがって、SX3072の年代はSX3074河川跡埋没以降から10世紀前葉以前と考えられる。

なお、SX3072および同一の遺構であるSX2079は平面形や壁の立ち上がり方などが一定せず、また埋土もやや粒の大きい砂を主体とした自然堆積である。これらの特徴は第26・27次調査で発見した南北大路の側溝や路面を削る水害の痕跡と似ていることから、SX3072は人為的な掘り込みとは考えにくく、むしろ水害等の激しい水の流れによって形成されたと考えられる。このことから、この遺構と貞觀11(869)年に起きた陸奥国大地震による津波との関連性を調べるために埋土の珪藻分析を実施した。珪藻とは藻類の一種で、淡水や海水などの環境に応じて特定の生息域を持つ。そのため、津波によって海水が流れ込み、本來淡水性や汽水性の珪藻しか生息しない本調査区から海水性のものが検出されることが予想された。その結果、海水性の珪藻は検出されなかつたことから、今回の分析からSX3072が津波の痕跡であることを裏付けるには至らなかつた。



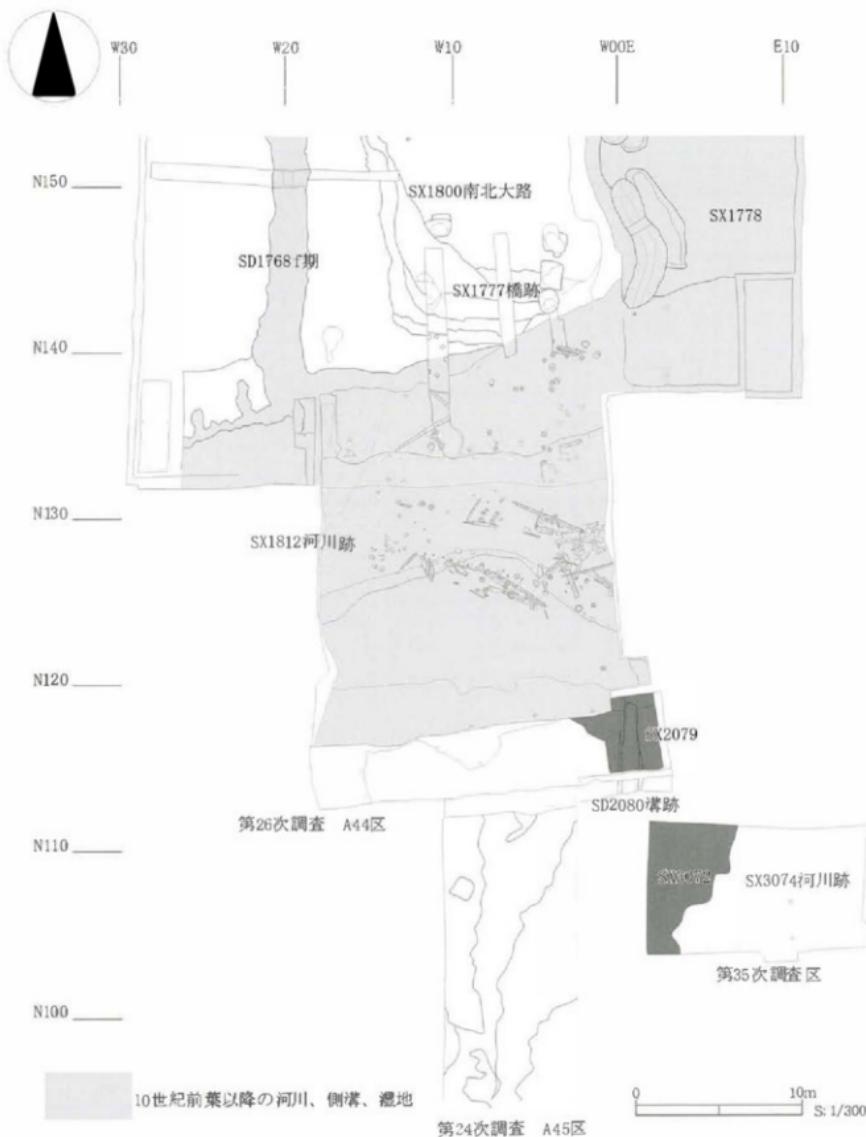
第2図 遺構平面図・断面図



単位(cm)

番号	種類	遺跡・層位	外観		口径	底径	高さ	保存状態	参考
			前面	背面					
1	土器器・壺	SE3074-1-1	ロクロナガ、体側下半：牛筋ち ヘラケズリ	ロクロナガ、粘土結塊み上げ痕 底泥下：ナゲ	21.6 24/24	7.5 34.8	- 2-2	R.1 R.2	R.1 R.2
2	土器器・壺	SE3074-1-1	ロクロナガ、体側下半：牛筋ち ヘラケズリ	ロクロナガ、粘土結塊み上げ痕 底泥下：ナゲ	21.4 21/24	- -	- -	- -	R.1 R.2
3	土器器・壺	SE3074-1-1	ロクロナガ、体側下半：牛筋ち ヘラケズリ	ロクロナガ、体側下半：ナゲ	- 13/24	8.5 -	2-3 -	R.3 R.3	目録 底泥：ヘラケキ「X」

第3図 出土遺物



第4図 第35次調査区と周辺の調査区



1 調査区全景 南東より



2 調査区全景 東より



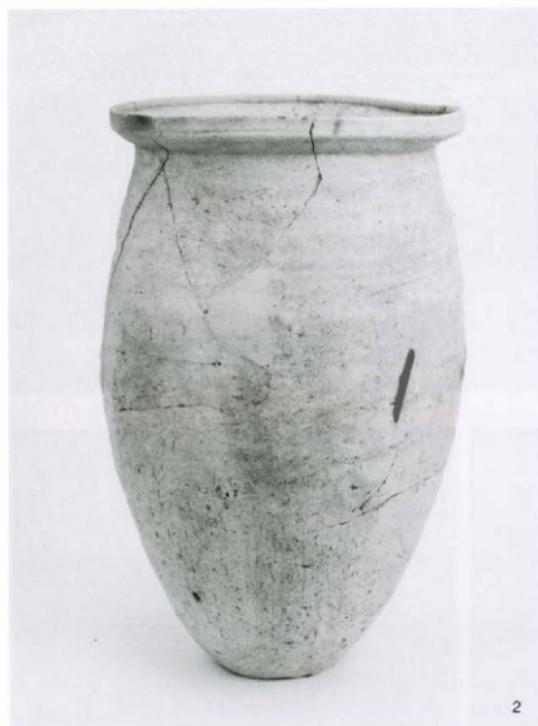
3 SX3074河川跡 土師器甕出土状況 東より



4 SX3074河川跡 掘り抜き断面 南より



1 調査区西壁セクション 東より



2 SX3#74河川跡・1層出土
土師器甕(第4図1 R1 S:1/3)
3 SX3#74河川跡・1層出土
土師器甕 底部(第3図1 R3 S:1/3)

2

写真図版2

多賀城市、市川橋遺跡における珪藻分析

株式会社 古環境研究所

1.はじめに

珪藻は、珪質の被膜を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境原の指標として利用されている。

ここでは、市川橋遺跡で採取された堆積物について珪藻分析を行い、堆積環境を検討する。

2. 試料

分析試料は、試料2（砂礫土）と試料3（砂礫土）の2点である。

3. 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

1) 試料から 1cm^3 を秤量する。

2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、一晩放置する。

3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。

4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600~1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は、珪藻被膜が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

試料から出現した珪藻は、真一中塩性種（海-汽水生種）4分類群、貧塩性種（淡水生種）47分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表1に示す。また珪藻総数を基準とする百分率を算定したダイアグラムを図1に示す。

以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔真一中塩性種〕

Achnanthes delicatula、*Actinocyclus* sp.、*Navicula perigrina*〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Amphora capulata*、*Adacoseira* sp.、*Caloneis lauta*、*Coccconeis placentula*、

Diploneis sp.、*Fragilaria construens*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Meridion circulare v. constrictum*、*Navicula contenta*、*Navicula decoloris*、*Navicula elginiensis*、*Navicula mutica*、*Navicula papula*、*Navicula viridula* v. *rostellata*、*Nitzschia brevisima*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia interrupta*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia viridis*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Rho palodis gibberula*、*Suriella angusta*

1) 試料3

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Nitzschia brevisima*、*Hantzschia amphioxys*が優占し、中～下流生河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginiensis*の流水性種がやや高率に出現する。真一中塩性種（汽水-海水生種）の海水砂質干潟指標種群の*Achnanthes delicatula*が低率に出現する。

2) 試料2

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、中～下流生河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginiensis*などの流水性種の占める割合が高く、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*を主に*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻の割合もやや高い。真一中塩性種（汽水-海水生種）の海水砂質干潟指標種群の*Achnanthes delicatula*が低率に出現する。

5. 硅藻分析から推定される堆積環境

以下、下部より堆積環境の推定を行う。

1) 試料3（砂礫土）

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、中～下流生河川環境指標種群ないし沼沢湿地付着生環境指標種群の流水性種が優占し、陸生珪藻もやや高率に出現する。こうしたことから、河川ないしその縁辺の水草の生育する流水域からやや湿った環境が示唆される。海水砂質干潟環境指標種群などの真一中塩性種（汽水-海水生種）が低率に出現することから、若干ではあるが河口域の干潟の影響を受けた可能性が示唆される。

2) 試料2（砂礫土）

珪藻の密度がやや低く、陸生珪藻が高率となり優占する。中～下流生河川環境指標種群および沼沢湿地付着生環境指標種群の流水性種がやや高率に出現する。こうしたことから、河川の縁辺の流水の影響を受ける湿った環境が示唆される。

6. まとめ

市川橋遺跡で採取された2試料について珪藻分析を行った。その結果、下部の試料3（砂礫土）の層準では河川ないしそ

の縁辺の水草の生育する流水域からやや湿った環境が示唆され、弱いながら河口域の干渉の影響が推定された。試料2(砂礫土)の箇欄になると、河川の縁辺の流水の影響を受ける湿った環境が示唆された。

参考文献

- Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition
Arch.Hydrobiol., Suppl.15,p.131-506.
- Patrick, Reimer, C. W.(1966) The diatom of the United States,
vol. I. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13,
The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and
pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p.
National Environmental Research Center.

Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of
Philadelphia, 213p.

Asai,K.,&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic
Diatom Species into Three Ecological Groups relating to
Organic Water Pollution(2) Saprophytic and saproxenous
taxa.Diatom,10,p.35-47.

小林正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが國の導入とその展望—、植生史研究 第1号、植生史研究会、p.29-44。

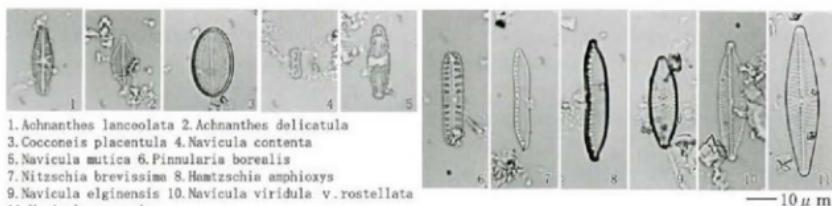
小林正人(1988)珪藻の環境指標群の設定と古環境復原への応用、第四紀研究 27, p.1-20。

安藤一男(1990)淡水珪藻による環境指標群の設定と古環境復原への応用、東北地理 42, p.73-88。

伊藤良永・堀内誠司(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、珪藻学会誌、6, p.23-45。



図1 市川橋遺跡における主要珪藻ダイアグラム



IV 市川橋遺跡第37次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理地内の個人住宅建設に伴うものである。住宅の基礎工事にあたっては、径5cm、長さ7mの鋼管杭を打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、施工主及び施工業者と基礎工法の変更についての協議を行ったが、申請された工法で実施することに決定した。

これを受け、発掘調査にかかる協議を開始することとなった。当該区は、周辺の調査より城外の幹線道路である南北大路の西側溝上にあることが明らかであり、古代都市を解明する上では重要な地点であることから、調査区の設定及び期間について数回の打ち合わせを設けた。この結果、施工主の協力により、調査区については建物の範囲外でも可能な限り広範囲の調査を実施できること、期間については8月中旬までなら可能であることの了解を得た。その後、平成15年6月6日、土地所有者より発掘調査についての依頼書及び承諾書の提出を受け、6月23日より現地調査を開始した。

初日は、重機による表土除去を行ったが、区画整理による厚さ1.5mの盛土除去に終始した。翌24日、旧水田層の除去を行うとともに、作業員を導入し第26次調査後に施した遺構保護層の除去及び遺構検出作業を開始した。その結果、灰白色火山灰降下以降のSX3070南北大路とSD3071西側溝、SD3063~3067小溝群などを発見し、これらの遺構が墨灰色砂質土(Ⅲ層)上面で検出されることを確認した。27日より、Ⅲ層上面検出遺構の埋土除去を行い、SD3071では灰白色火山灰降下以降に2時期(c→d期)の変遷があること、そのうちc期がSD3073東西溝と接続することを確認した。7月2日、実測図作成用の基準点を設置し、平面図・断面図の作成に取りかかるが、梅雨時期の調査であったことから雨天が続き、約1週間調査を中断した。9日、調査区の復旧作業を行い、午後より平面図作成を再開する。11日、Ⅲ層上面検出遺構の平面図が終了し、午後よりこれの除去及び下層遺構の検出作業に入る。精査の結果、下層ではSD3071南北大路西側溝(a・b期)とSX3061河川跡などを検出し、SD3071bがSX3061河川に合流していることを確認した。14日より、これら下層遺構の埋土除去を開始し、SX3061より多量の土器類をはじめ、付札木簡や削屑などを発見した。18日、下層遺構の埋土除去が完了し、現地調査的一切を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 基本層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

I a 層 区画整理構造に伴う盛土層で、層厚は約1.6mである。

I b 層 現代の水田耕作土で、層厚は約20cmである。

II a 層 炭化物が多く混入する褐色粘土(7.5YR4/1)。南西端部のみ残存。

II b 層 褐色シルト(10YR4/1)や黒褐色粘土(10YR3/1)が斑状に混入する灰黄褐色シルト(10YR5/2)。南西端部のみ残存。

III 層 炭化物が若干混入する褐色砂質土(10YR4/1)で、層厚は10~20cmである。今回の調査では、III層を境に上層の遺構と下層の遺構を確認した。

IV 層 東半部で確認した、にぶい黄橙色砂(10YR6/4)。本地区周辺においては、この層が古代の最終遺構検出面である。

V 層 SX3061 河川跡底面で確認した泥炭層(スクモ層)。一部深掘りの結果、その下層では砂と互層に堆積していることから、古い河川埋土の可能性がある。

(2) 発見遺構と遺物

S X3070南北大路跡(第2~6図)

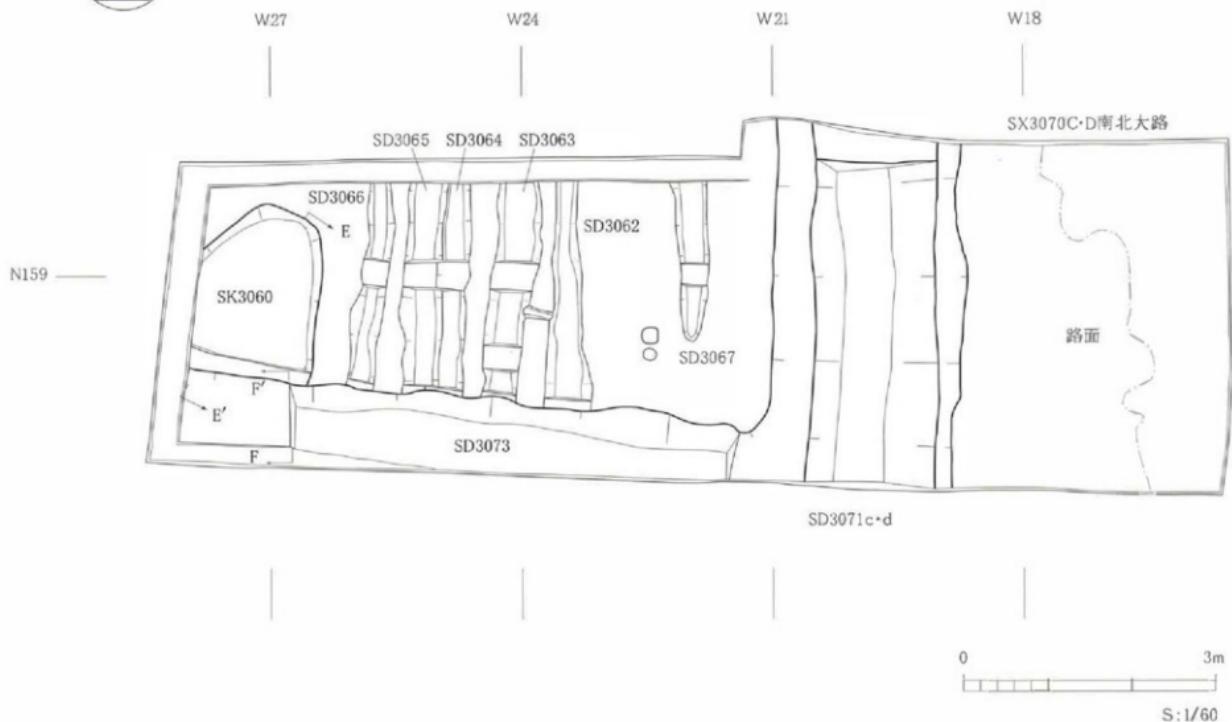
調査区東半部で発見した、幅23~25m段階の南北大路跡である。路面とSD3071西側溝を検出し、路面で2時期(a→b)、西側溝で4時期(a→d)の変遷を確認した。ここでは、側溝の変遷から4時期(A→D)に区分し、各時期ごとに説明する。

S X3070A: 北半部でSD3071aを約1.4m確認した。ほとんどがB期の側溝に破壊されているため、規模及び路面については不明である。

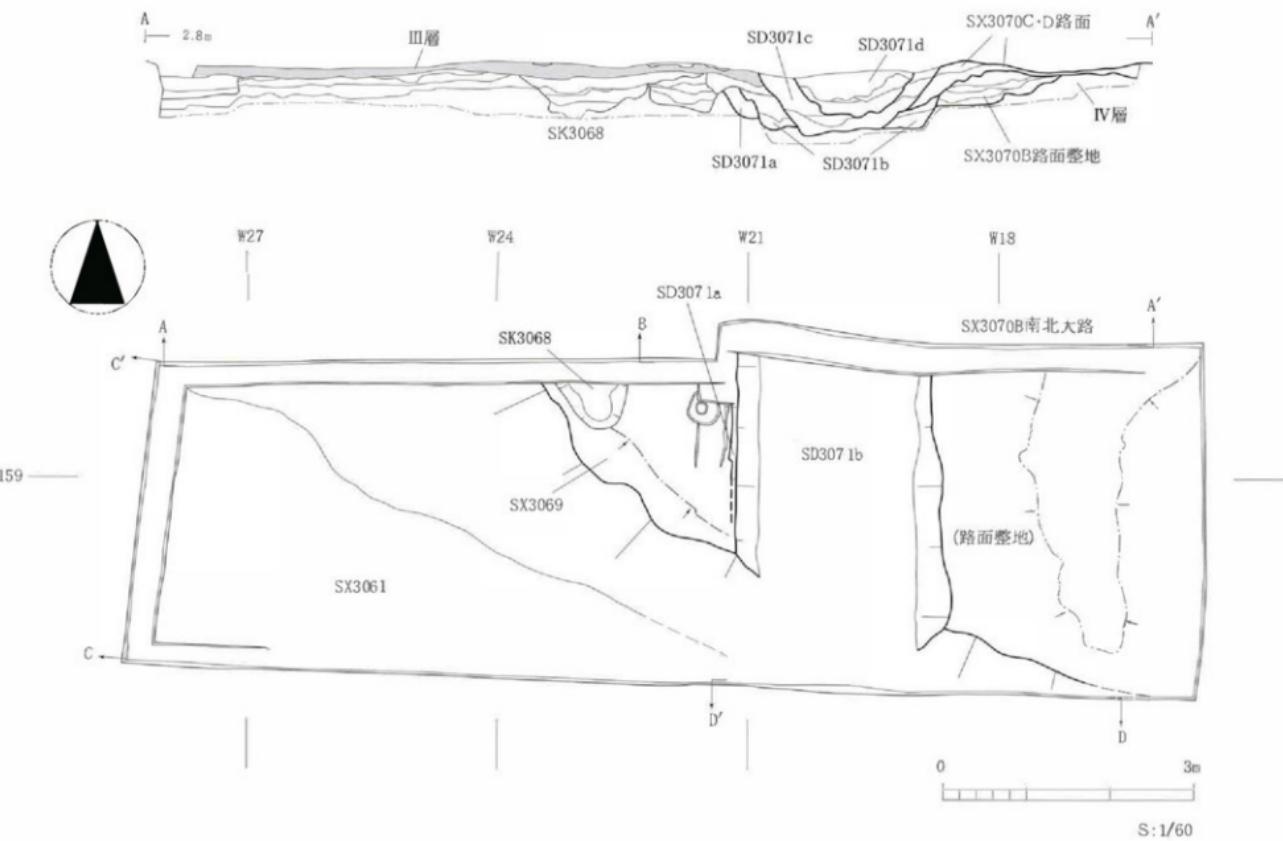
S X3070B: III層下層で路面aとSD3071bを発見した。調査区南端部でSX3061河川と接続している。路面ににぶい黄橙色砂(IV層)であるが、側溝際からSX3061と接続する南端部及び調査区東端部にかけて整地層を確認した。整地層は側溝隙で40cmの厚さがあり、4層に大別することができる(第4図:13~16層)。13層は黒褐色粘土が小ブロック状に多量に混入する灰黄褐色砂質土、14層は灰黄褐色砂が混入する黒褐色粘土、15・16層は黒褐色粘土が多量に混入するにぶい黄橙色シルトである。西側溝は約3.6m検出した。規模は、上幅2.3~2.5m、下幅1.8~1.9m、深さ0.4~0.5mである。方向は北で0度41分東に傾いており、発掘基準線とはほぼ一致している。断面形は、逆台形を呈しており、壁はほぼ垂直に立ち上がりっている。底面はC期側溝に大部分が破壊されているものの、残存する箇所では概ね平坦である。底面における比高差もほとんどない。埋土は2層(第4図:11・12層)に大別できる。上層は黒褐色粘土が多量に混入する褐色粘土質土、下層は黒色粘土、緑灰色砂が多量に混入する黒褐色粘土である。

遺物は、側溝から須恵器杯(Ⅲ類)が出土している。

S X3070C: III層上面で路面bとSD3071cを発見した。調査区南端部でSD3073東西溝と接続している。路面の埋土は2層(第4図:9・10層)に大別でき、下層が褐色砂質土、上層が黒褐色砂質土である。西側溝は上幅2.2~2.3m、下幅1.3~1.4m、深さ0.7~0.8mである。方向は北で0度53分東に傾いており、発掘基準線とはほぼ一致している。断面形は、逆台形を呈しており、壁の立ち上がりは急である。底面

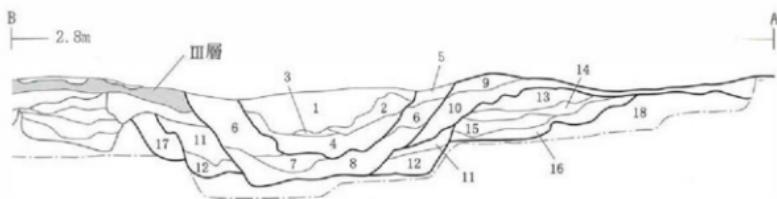


第2図 Ⅲ層上面検出遺構平面図

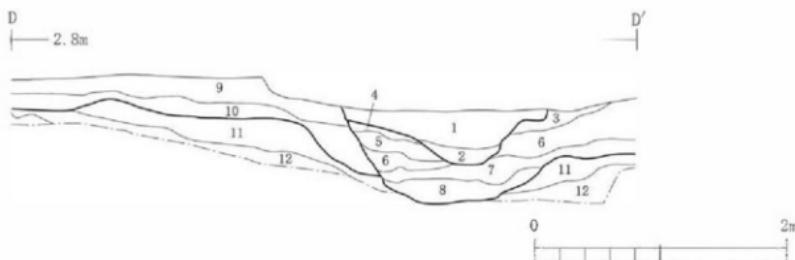


第3図 II層下層棲出構造平面図

北壁断面



南壁断面



北壁断面

No.	土色・土性	備考	No.	土色・土性	備考
1	黒褐色粘土 (10YR3/1)	炭化物が斑状に混入	SD3071 d 断面	11	緑褐色粘土 (5GY2/1) が混入
2	黒色粘土 (10YR1.7/1)	炭化物が多量に混入		12	オリーブ褐色粘土 (5Y2/1) が多量に混入
3	にじみ 黄褐色砂 (10YR4/3)	粗砂層		13	灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)
4	黒褐色粘土 (10YR2/2)	粗砂、植物遺体が多量に混入		14	灰褐色粘土 (10YR3/2) が混入
5	灰黃褐色砂質土 (10YR4/2)			15	にじみ 黄褐色シルト (10Y6/6)
6	褐灰色砂質土 (10YR4/1)			16	黒褐色粘土 (10YR6/6) が多量に混入
7	緑灰褐色砂 (7.5GY6/2)			17	褐灰色粘土 (10YR4/1)
8	褐灰色砂質土 (10YR4/1)			18	にじみ 黄褐色シルト (10Y6/4) が多量に混入
9	黒褐色砂質土 (2.5YR2/2)	黒褐色粘土 (10YR3/2) が混入			
10	褐灰色砂質土 (10YR4/1)	にじみ 黄褐色シルト (10Y6/6)、砂粒が混入			

南壁断面

No.	土色・土性	備考	No.	土色・土性	備考	
1	黒褐色粘土 (10YR3/1)	炭化物が斑状に混入	SD3071 c 断面 (6・7層は SD3073 標識 I・II 層と同一)	9	黒褐色砂質土 (2.5Y3/2)	黒褐色粘土 (10YR3/1) が混入
4	黒褐色粘土 (10YR2/2)	粗砂、植物遺体が多量に混入		10	褐灰色砂質土 (10YR4/1)	にじみ 黄褐色シルト (10Y6/6)、砂粒が混入
e	褐灰色砂質土 (10YR4/1)	炭化物が斑状に混入		11	緑褐色ねんど (10YR3/1)	炭化物が多量に混入
b	灰黃褐色砂 (10YR4/2)			12	緑灰褐色砂 (10Y6/1)	オリーブ褐色粘土 (5Y2/1) と互層
g	灰黃褐色砂質土 (10YR4/2)					
6	褐灰色砂質土 (10YR4/1)					
7	緑灰褐色砂 (7.5GY6/1)	灰白色火山灰二重堆積 (6・7層に多量に混入)				
8	褐灰色砂質土 (10YR4/1)					

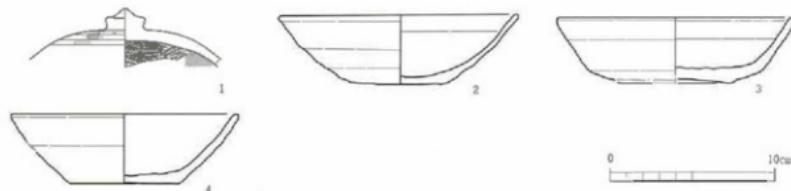
第4図 SD3071南北大路西側溝断面図

には凹凸はほとんど見られず平坦である。底面における比高差については、北側から南側に向かって約20cm傾斜している。埋土は4層に大別できる(第4図: 5~8層)。5層はにぶい黄褐色砂質土、6層は褐灰色砂質土、7層は炭化物が混入する褐灰色砂質土、8層は黒褐色シルト、にぶい黄褐色土が混入する褐灰色砂質土である。なお、南壁のa・b層は平面では確認していない。また、いずれの層にも灰白色火山灰が混入するが、特に6・7層にはブロック状に多量に混入している。

遺物は、路面埋土から土師器杯(BV類)、須恵器杯(V類)、鐵治津(椀形)、側溝から土師器杯(BV類)・高台付杯・蓋・甕(B類)、須恵器杯(皿類・V類)・甕・長頸瓶、須恵系土器杯・丸瓦(II類)、平瓦(I A a類・II B a類・II C類)がある。

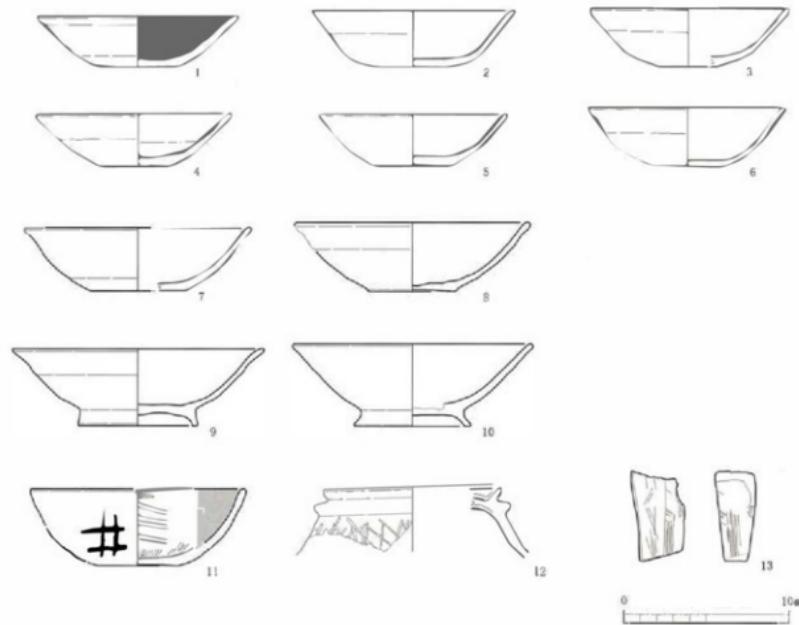
S X3070D: 路面とSD3071dを発見した。路面は、C期の路面bを踏襲している。西側溝の規模は、上幅1.4~1.5m、下幅0.5~0.6m、深さ0.5~0.6mであり、方向は北で1度47分東に傾いている。断面形は、椀形を呈しており、壁の立ち上がりは緩やかである。底面には北側で凹凸が認められるもの、全体的には平坦である。底面における比高差は、ほとんどない。埋土は4層に大別できる(第4図: 1~4層)。1層は炭化物が若干混入する黒褐色粘土、2層は炭化物が多量に混入する黒色粘土、3層はにぶい黄褐色粗砂、4層は黒褐色粘土である。

遺物は、側溝から土師器杯(BV類)・甕(A類・B類)、須恵器杯・甕・長頸瓶、須恵系土器杯・高台付杯、灰釉陶器長頸瓶、円面鏡、丸瓦(II類)、平瓦(I A a類・II B a類)がある。全体の出土数では、須恵系土器の割合が40%と高い割合を占める。また、土師器杯には墨書き土器(墨書き「井」)がある。



番号	種類	遺跡・位置	特徴		C期 西側溝	西側溝 底高	基高	等高線年	埋土年	備考	単位(cm)
			内面	外面							
1	土師器・直	SD3071c-1層	クロナゲ、凹凸・ヘタズリ	ヘビガキ・黒色地	—	—	—	—	827		
2	須恵系土器・ 瓶	SD3071c-1層	クロナゲ、凹凸・ボロ	クロナゲ	(14.3) 15/24	5.9 24/24	4.2	3-2	826		
3	須恵器・杯	SD3071b-2層	クロナゲ、凹凸・ボロ	クロナゲ	(14.3) 8/24	6.9 24/24	4	—	826	出雲	
4	須恵器・杯	SD3070D 底面埋土	クロナゲ、底部・凹凸・ボロ	クロナゲ	12.7 3/24	6.5 24/24	4.3	—	866	V類	

第5図 SD3071b-c溝跡、SX3070南北大路路面埋土出土遺物



番号	種類	遺物・層位	断面		内面	内面単位	内面単位保存単位	器形	写真記載	登録番号	備考	単位(cm)
			外縁	内縁								
1	直腹平土器・ 鉢	1層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(12.1)	5.0	4/24	13/24	3.2	R31		
2	直腹平土器・ 鉢	1層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(12.1)	4.4	4/24	12/24	3.5	R16		
3	直腹平土器・ 鉢	1層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(11.9)	4.7	17/24	4/24	4.6	R12		
4	直腹平土器・ 鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(11.9)	4.5	5/24	24/24	3.3	R20		
5	直腹平土器・ 鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(11.3)	4.7	5/24	24/24	3.15	R23		
6	直腹平土器・ 鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(11.9)	3.5	13/24	20/24	3.6	R11		
7	直腹平土器・ 鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(13.7)	5.8	20/24	12/24	3.85	R19		
8	直腹平土器・ 鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(14.6)	5.2	4/24	24/24	4.15	R21		
9	直腹平土器・ 鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(15.1)	7.2	7/24	12/24	4.55	R18		
10	直腹平土器・ 高台付鉢	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ロクロナデ	(14.5)	7.1	13/24	21/24	5.1	3-1	R17	
11	土師器・ 环	2層	ロクロナデ、底径：圓軸み切刃	ヘラスガキ・洗色処理	(12.0)	4.9	6/24	16/24	4.7	R22	体間に墨書き「#」EV記	
12	円盤環	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(10.5)	—	5/24	—	—	3-10	R14	
13	破石	2層	ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	R30		

第6図 SD3071d溝跡出土遺物

SD3073溝跡（第2・7図）

調査区南西部のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡で、長さ約7mにわたって検出した。SK3060、SD3062・3063・3064・3065・3066小溝群と重複し、それよりも新しい。また、東端部でSD3071cと接続している。方向は、西で4度50分北に傾いている。規模は上幅1.3~1.5m、下幅0.5~0.6m、深さ0.4~0.5mである。断面形状は、やや丸みを帯びた逆台形を呈しており、壁は垂直に立ち上がっている。底面は概ね平坦であり、本調査区内での比高差はほとんどない。埋土は2層に大別できる。1層は褐色砂質土であり、灰白色火山灰や炭化物が混入している。2層は黒褐色粘土であり、多量の炭化物が混入している。

遺物は、土師器杯（B II類・B V類）・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（III類・V類）・甕・瓶、須恵器・土器・製塙土器、砾石がある。



第7図 SD3073溝跡断面図

SD3632~3637小溝群（第2図）

調査区西半部のⅢ層上面で発見した南北方向の小溝群である。SD3071と重複しており、それよりも古い。方向は、北で2度~6度東に傾いている。規模は上幅0.3~0.6m、下幅0.2~0.3m、深さ4~10cmである。断面形状は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が著しいもの（SD3067）と平坦なもの（SD3062~3066）がある。埋土は褐色砂質土であり、灰白色火山灰が自然体積するもの（SD3062・3065）と、斑状に二次堆積するもの（SD3063・3064・3065・3066）がある。

遺物は、土師器杯（B I類・B II類・B V類）・甕（B類）・瓶、須恵器杯（II類・III類・V類）・瓶、灰釉陶器手付き瓶・丸瓦（II類）・平瓦（II B b類）、製塙土器がある。

SK3060土壤（第2・8・9図）

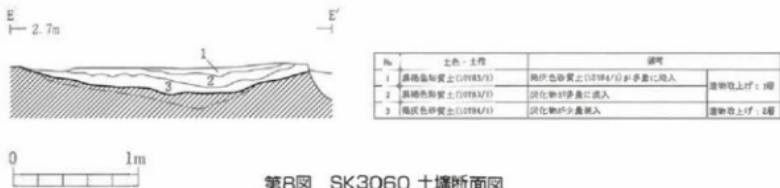
調査区西端部のⅢ層上面で発見した土壤である。SD3073と重複し、それよりも古い。平面形は、南北2m以上、東西1.4m以上の不整形であり、深さは約20cmである。断面形は非常に緩やかな皿状を呈しており、底面には若干の凹凸が確認できる。埋土は3層に大別できる。1層は褐色砂質土が多量に混入する黒褐色粘土、2層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘土、3層が炭化物が若干混入する褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯（B I類・B II類・B V類）・高台付杯・甕、須恵器杯（III類・V類）・高台付杯・甕・瓶、製塙土器、土器製円盤がある。

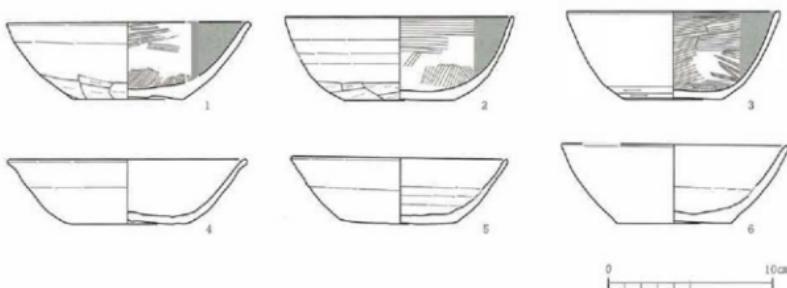
S X3069河川（第3・10図）

調査区北側のⅢ層下層で発見した河川跡である。SX3061と重複し、それよりも古い。北側部分の埋土を一部除去したのみであるため、詳細については明らかではない。

遺物は、土師器杯（A類）が出土している。



第8図 SK3060 土壤断面図



番号	種類	遺物・層位	特徴		口徑 横径 れんきやく	高さ れんせん	断面形 じやくめい	壁厚 ばくこう	写真番号	備考
			外面	内面						
1	土器部・杯	1層	ロクロナデ 遺物: 鉄板(鉄)一平陶もへラケヅリ	ヘラミガキ・黑色処理	14.9 13.0 13.0	6.8 6.6 6.6	4.65	81	DII-e類	
2	土器部・杯	1層	ロクロナデ、平陶もへラケヅリ	ヘラミガキ・黑色処理	(13.0) 6.9	6.6 15.2	5.05	82	DII類	
3	土器部・杯	2層	ロクロナデ、田舎もへラケヅリ	ヘラミガキ・黑色処理	(12.85) 4.7	5.8 24/24	5.4	83	D I類	
4	遺物部・杯	2層	ロクロナデ、遺物: ヘラ切り	ロクロナデ	(14.6) 9.24	7.7 21/21	3.95	84	Ⅳ類	
5	遺物部・杯	2層	ロクロナデ 遺物: ヘラ切り	ロクロナデ	13.2 22/21	6.8 24/24	4	85	Ⅲ類	
6	遺物部・杯	1層	ロクロナデ 遺物: 鉄板(鉄)もへラケヅリ	ロクロナデ	13.75 17/14	6.9 24/24	6.0	86	V類	

第9図 SK3060 土壤出土遺物



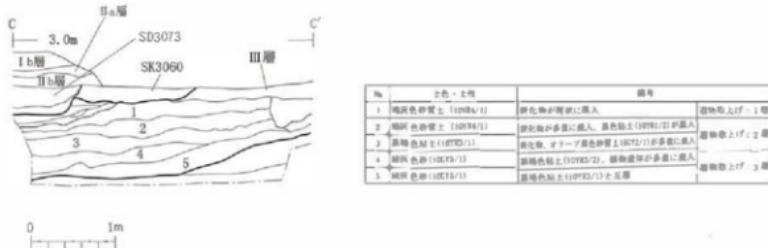
番号	種類	遺物・層位	特徴		口徑 横径 れんきやく	高さ れんせん	断面形 じやくめい	壁厚 ばくこう	写真番号	備考
			外面	内面						
1	土器部・杯	手用もへラケヅリ、ロクロナデ	ヘラミガキ、ロクロナデ		15.6 18/24	9.45			88	A類

第10図 SX3069 河川跡出土遺物

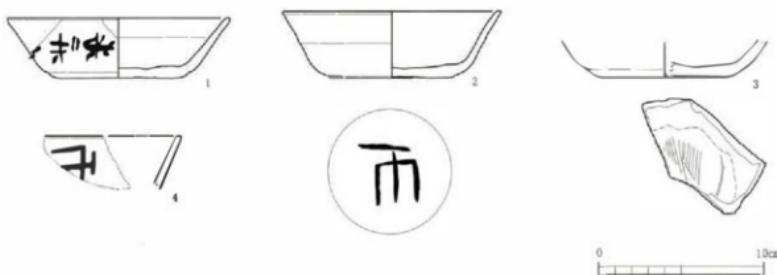
SX3061 河川跡（第3・11～18図）

調査区西半部から南側のIII層下層で発見した東西方向の河川跡である。SX3070 南北大路と重複しており、このうちのB期と接続し、C期の路面に覆われている。規模は上幅 4.5m以上、深さ 1m以上である。底面及び断面は凹凸がありほとんどなく平坦であり、特に壁については地山と埋土に明瞭な境が確認できた。埋土は5層に大別できる。1層は炭化物が若干混入する褐色粘質土、2層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土、3層は炭化物・黒褐色砂質土が多量に混入する黒色粘質土、4層は黒褐色粘土が多量に混入する緑灰色砂、5層が緑灰色砂と黒褐色粘土の互層である。

遺物は、土師器杯（B I類・B II類・B III類・B V類）、高台付杯、甕（B類）、須恵器杯（II類・III類・V類）、杯蓋・高台付杯、双耳杯、棱角・甕・瓶・櫃、軒平瓦、丸瓦、刀子、木筒、挽物皿、曲げ物蓋板、楕円型漆などがある。このうち須恵器杯では、全体に占めるII類の割合が9割以上と圧倒的に多い。また、須恵器杯、土師器杯には、墨書土器「米二口口」・「本」・「木」や漆付着土器、油煙付着土器などがある。木筒は5点出土している。付札が2点、削屑が1点、用途不明のものが2点である。

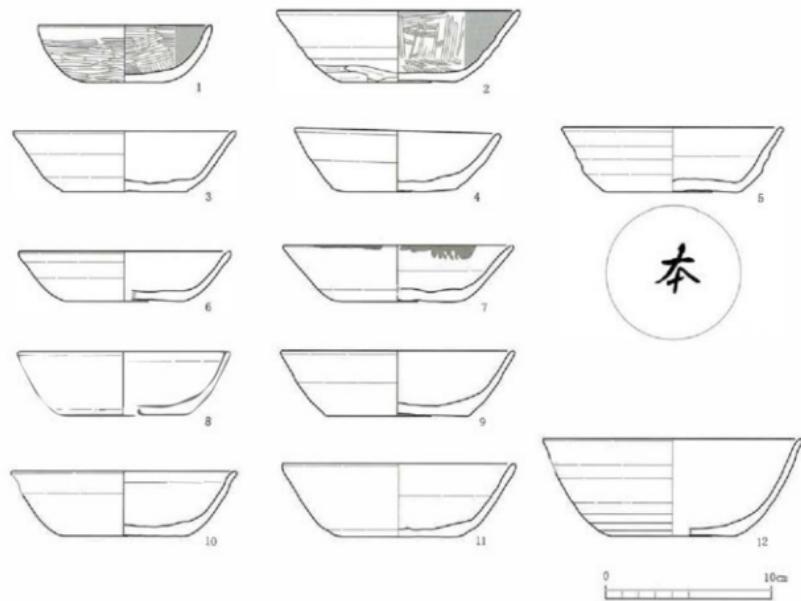


第11図 SX3061 河川跡断面図



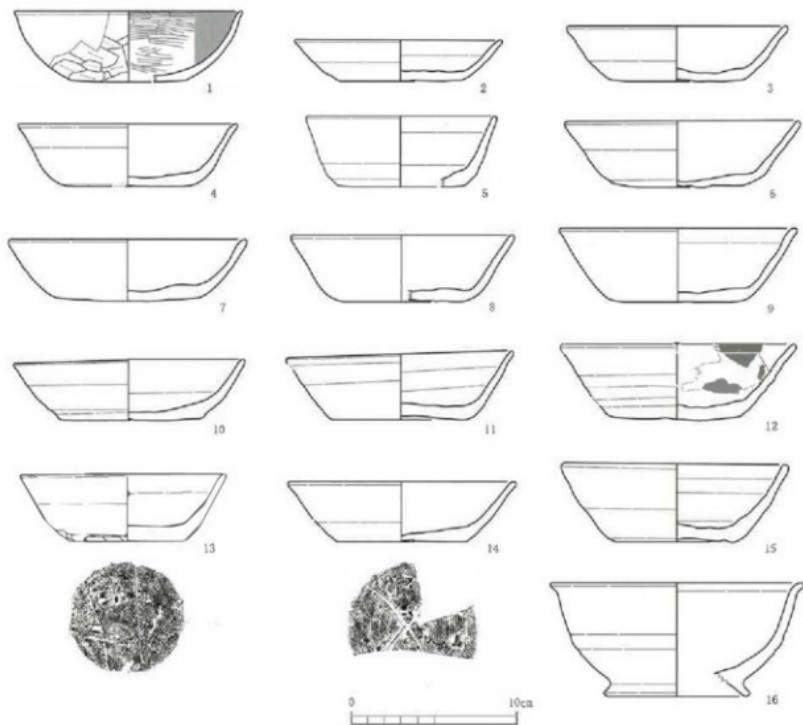
番号	基盤	追跡・層位	形状		口径 内径 厚	底 底面 内径 厚	高さ 実測高	壁厚 実測	試験番号	備考	単位(cm)
			外径	内径							
1	須恵器・杯	1層	ロクロナダ 底面・ヒラ切り	ロクロナダ	(13.6) 1.26	12.24	2.7	3-14	853	瓶形に墨書き「米二口口」、三脚	
2	須恵器・杯	1層	ロクロナダ 底面・ヒラ切り	ロクロナダ	(13.6) 3.74	7.9 24.24	3.6	-	855	瓶形に墨書き「木」、三脚	
3	須恵器・杯	1層	ロクロナダ 底面・ヒラ切り	ロクロナダ	-	9.24	-	-	856	四脚	
4	須恵器・杯	1層	ロクロナダ	ロクロナダ	---	---	---	---	857	墨書き「木」	

第12図 SX3061 河川跡1層出土遺物



番号	種類	遺構・部位	特徴		口径	底部 厚さ	底面 形状	底面 形状	光吸收率	固有
			外面	内面						
1	土器部・杯	2層	ロクロナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ・黑色処理	(16.4)	4.6	直	直	3.3	R95
2	土器部・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ヘラミガキ・黑色処理	(16.4)	2.0	2.4	2.4	3.6	R93
3	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ヘラミガキ・黑色処理	(16.8)	5.6	直	直	3.7	R86
4	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	3.3	2.4	2.4	4.45	R87
5	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	8.1	直	直	3.75	R88
6	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	8.1	直	直	3.95	R49
7	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	7.6	直	直	3.95	R49
8	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	7.6	直	直	3.95	R49
9	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	7.6	直	直	3.95	R49
10	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	7.6	直	直	3.95	R49
11	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	7.6	直	直	3.95	R122
12	直壁器・杯	2層	ロクロナデ、直縁、凹面みぞり	ロクロナデ	(16.4)	7.6	直	直	3.95	R91

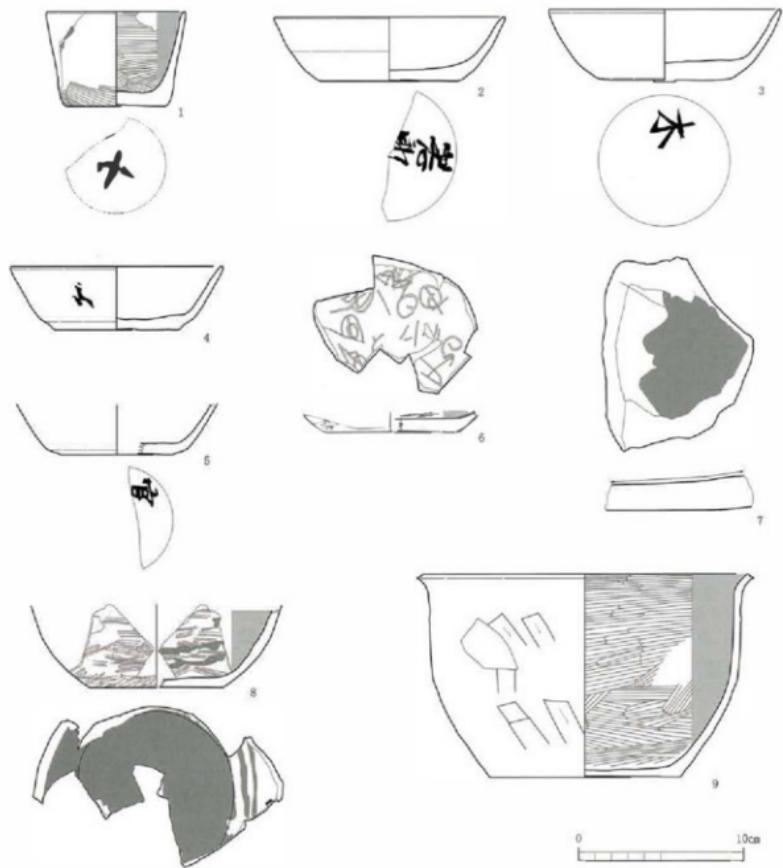
第13図 SX3061 河川跡2層出土遺物



単位(cm)

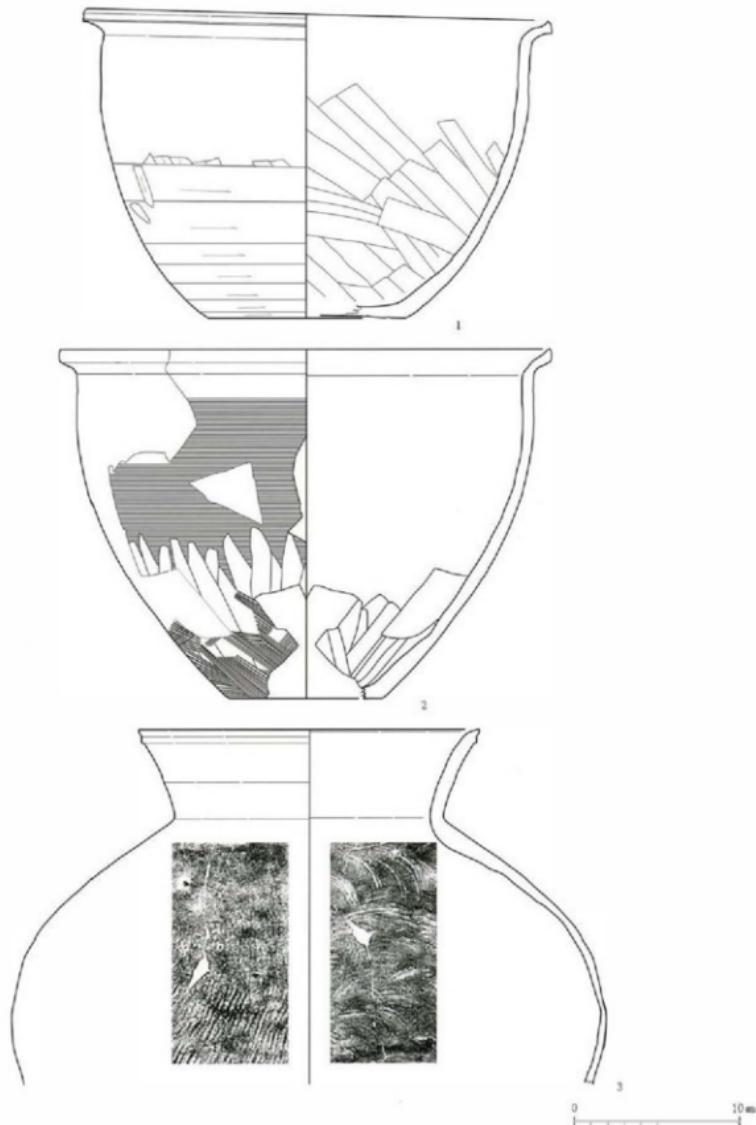
番号	種類	遺跡・層位	形態		白泥 焼成度 目録 番号	底径 焼成度 目録 番号	高さ 厚さ 目録 番号	壁厚 目録 番号	参考
			外面	内面					
1	土器部・杯	3層	ロクロナデ 体部下部へ底部: 手持ちハラケズリ	ヘラミガキ、施色焼程	13.5 2.5/24	16.0 6.24	4.3		R62 BⅡ類
2	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	13.5 21/24	7.4 24/24	2.6	3-4	R125 皿類
3	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	13.7 2.5/24	8.0 6.24	3.1		R116 皿類
4	須恵器・杯	3層	ロクロナデ 体部下部へ手持ちハラケズリ	ロクロナデ	13.2 5/24	7.7 7/24	3.8		R127 DⅣ類
5	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	13.5 3/24	7.0 12/24	4.3		R79 皿類
6	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	14.3 9/24	8.2 24/24	4.1		R72 皿類
7	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	14.5 2.5/24	8.9 6.24	3.8		R129 皿類
8	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	13.5 4/24	7.2 5/24	3.6		R131 皿類
9	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	14.4 4/24	7.6 18/24	4.5		R133 皿類
10	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	14.1 12/24	8.8 24/24	3.7		R80 皿類
11	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	14.1 14/24	8.7 24/24	4.0		R78 皿類
12	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	14.25 7/24	7.9 24/24	4.6		R134 直折行脛、皿類
13	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り 体部下部へ底部: 手持ちハラケズリ	ロクロナデ	12.5 9/24	6.9 24/24	4.1		R114 底部にヘラガキ、DⅣ類
14	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: ヘラ切り	ロクロナデ	13.8 5/24	7.8 24/24	3.7		R115 底部にヘラガキ(?)、皿類
15	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部: 回転糸切引	ロクロナデ	13.7 13/24	7.7 24/24	4.8		R64 V類
16	須恵器 高台付杯	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	15.4 3/24	18.0 15/24	9.9		R82

第14図 SX3061 河川跡3層出土遺物(1)



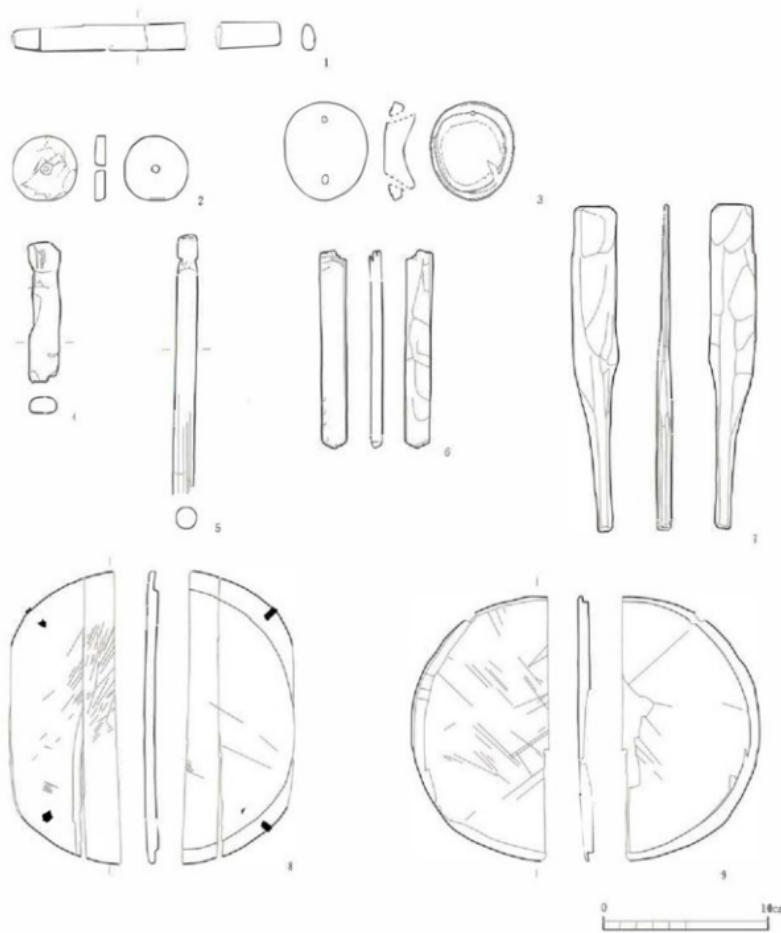
番号	種類	層構・層位	形態		口径	底径	高さ	半周周長	基盤番号	備考
			外面	内面						
1	土器部・杯	3層	ロクロナデ、底部下半：ヘラナブ 底部：回転式切り	ヘラミガキ、磨色处理	(6.2) 1/24	4.5 16/24	5.75	3-11	R119	底部に墨書き
2	骨器部・杯	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.9) 7/24	(8.2) 10/24	—	3-9	R121	底部に墨書き「口」。10層
3	骨器部・杯	3層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(7.0) 6/24	4.4 24/24	4.4	3-12	R122	底部に墨書き「水」。10層
4	骨器部・杯	3層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(10.3) 5/24	7.4 24/24	3.05	—	R117	床脚外側に墨書き。10層
5	骨器部・杯	2層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	— 1/24	— —	—	—	R129	底部に墨書き「口」。10層
6	土器部・杯	3層	ロクロナデ、底部：回転式切り 底部下半：手持ちヘラケメリ	ヘラミガキ、磨色处理	— 15/25	— —	3-7	—	R106	内部に附錠。B II c期
7	軸承器（骨器部・劍）	3層	—	—	—	—	—	3-8	R112	—
8	土器部・杯	2層	ヘラミガキ、磨色处理	ヘラミガキ、磨色处理	— 17/24	— —	—	—	394	内部に墨書き
9	土器部・甕	3層	ロクロナデ、手持ちヘラケメリ	ヘラミガキ、磨色处理	26.4 13/24	11.6 12/24	12.3	3-9	R126	—

第15図 SX3061 河川跡3層出土遺物(2)



番号	種類	遺物・層位	特徴		直径 mm	高径 率	断面 形	写真箇所	照相機 号	備考
			外周	内面						
1	須恵器・鏡	3層	ロクロナギ、 毛刷シラカベヌリ-凹版ヘタケヌリ	ロクロナギ、ヘラナギ	38.1 15.71	12.1 9.39	18.6	3-6	842	
2	須恵器・鏡	3層	ロクロナギ、 毛刷シラカベヌリ-凹版ヘタケヌリ-ヘタ	ロクロナギ、ヘラナギ	(26.8) 4/24	(9.3) 4/24	21.25	-	843	
3	須恵器・鏡	3層	平行テクス	並て丸底	(26.8)	-	-	-	841	

第16図 SX3061 河川跡3層出土遺物(3)

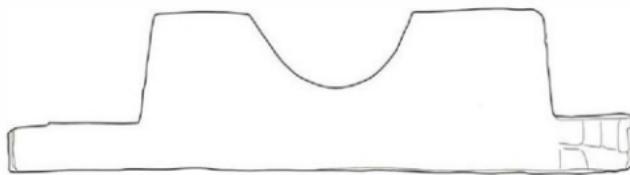


番号	種類	遺跡・層位	測量		年月(西暦)	地名番号	備考
			長さ	幅			
1	刀子	3層	長さ: - , 幅: (合側分) 1.3, (開側分) 最大1.55			R1	
2	木製品	3層	直径: 3.6, 厚大厚: 0.6,			R4	櫛形器
3	木製品・竹	3層	最大径: 6.0, 最大厚: 1.55			R2	2面削に穿孔あり
4	木製品	3層	長さ: 8.5以上, 最大厚: 1.0			R13	
5	木製品	3層	長さ: 16以上, 最大厚: 1.21			R11	
6	木製品	3層	長さ: 12以上, 残大幅: 1.5, 最大厚: 0.7			R1	木削成木製品?
7	木製品	3層	長さ: 19.0, 幅(身) 2.75, (頭) 0.95~4.2, 厚さ: (身) 0.3~0.6, (頭) 0.95			R9	
8	木製品・骨質	3層	長さ: 16.0, 最大厚: 0.65			R9	調査刀物質
9	木製品・骨質	3層	長さ: 16.0, 最大厚: 0.8			R9	調査刀物質

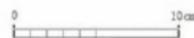
第17図 SX3061 河川跡3層出土遺物(4)



1

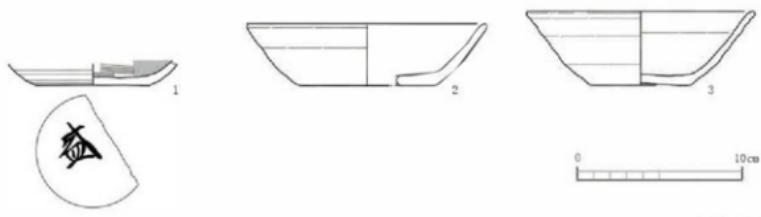


2



单位(cm)						
器号	性质	遗物・器物	法盒	年月日	登錄番号	備考
1 木製品 植物・茎	3層	口径：-、底径：20.5、基高：-		8.8	内函二万件復	
2 木製品	3層	高さ：36.2、所火幅：15.0、最大厚：1.5			25	

第18図 SX3061 河川跡3層出土遺物(5)



番号	種類	遺構・部位	外觀		特徴		口径 径高 径存率	底径 底存率	断面 断存率	壁厚 壁存率	写真番号	備考
			外側	内側	外側	内側						
1	土師器・新	皿形	ロクロナデ 底面下平～底部：圓輪ハテクズ	ヘラミガキ、輪巻状痕	—	(0.9) 14/24	—	—	—	854	底部外側に墨書き「盛」、S1型	
2	須恵器・新	皿形	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(1.4) 1/24	(0.9) 7/24	3.7	853	三脚			
3	須恵器・新	皿形	ロクロナデ 底部：圓輪底切り	ロクロナデ	(1.7) 4/24	(0.8) 14/24	4.5	851	V型			

第19図 III層出土遺物

3. 考察

今回の調査では、南北大路跡とこれに接続する東西溝跡・河川跡、土壤、小溝跡などを発見した。これらの遺構は基本層序III層をはさんで、上層の遺構群（SX3070C・D南北大路跡、SD3073 東西溝跡、SD3062～3067 小溝群、SK3060 土壤）と下層の遺構群（SX3070A・B南北大路跡、SX3061・3069 河川跡、SK3068 土壤）に大別することができる。また、上層の遺構では、SK3060 を除くすべての遺構埋土中に10世紀前葉頃に降下したとされる灰白色火山灰が自然堆積もしくは二次堆積しているのが確認できるが、III層及びその下層の遺構には全く認められない。このことは、SK3060以外の上層遺構の年代を、10世紀前葉以降とすると同時に、下層遺構については10世紀前葉以前に下限年代をもとめることができる。一方、出土した遺物を見ると、SX3061、SK3060から比較的多くの土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。以下、これら出土遺物の年代について検討した後、発見した遺構の年代についてまとめてみたい。

（1）出土遺物の年代

SX3061は基本層序III層下層で発見した河川跡であり、SD3071Bと接続している。埋土は3層に大別できるが、1・2層出土土器が少ないため、ここでは3層出土土器と併せて検討する。土師器杯では、A類が1点確認できる以外はすべてB類である。底部切離あるいは再調整が明らかなものは、B I類3点、B II類12点、B II c類5点、B III類1点、B V類7点あり、再調整を施すものが7割以上を占める。土師器甕は、9割以上がB類である。須恵器杯は、底部切離しが明らかなものはII類5点、III a類3点、III類146点、V類9点あり、無調整のIII・V類が9割以上を占めている。底径／口径比は49～67、径高指数は20～38、外傾度は19～40の間に分布しており、底径／口径比が54～61、径高指数が26～32、外傾度が26～29、31～34の間にややまとまって認められる。このような土師器杯・甕及び須恵器杯の特徴は、延暦24年（805）を上限とした9世紀中葉頃の年代が与えられている市川橋遺跡SD1522出土土器（註1）と類似していることから、SX3061出土土器についても9世紀初頭～中葉頃のものと考えられる。

SK3060はIII層上面で発見した土壤である。前述したことおり、埋土中に灰白色火山灰が全く含まれていないことから、10世紀前葉を下限年代とすることができる。出土遺物には土師器、須恵器がある。このう

ち土師器杯はすべてB類に限られ、底部切離しあるゝは再調整の明らかなものは、B I類1点、B II類2点、B V類2点である。底径／口径比は45～48、径高指数は31～42の間に分布している。土師器壺はA類が1点ある以外はすべてB類である。須恵器杯では、III類7点、V類6点であり、III類とV類がほぼ同量出土している。底径／口径比は50～53、径高指数は27～35の間に分布する。資料数は少ないものの、これらの特徴をみると、土師器杯に限って見れば、9世紀後半頃の年代が与えられている多賀城跡鴻の池第10～11層出土土器（註2）と類似している。一方、須恵器杯については、III・V類の割合がほぼ半々で、かつそれらが主体となる点をみると、9世紀中葉に位置付けられている多賀城跡S K2167出土の須恵器杯（註3）と類似している。したがって、S K3060出土土器については、9世紀中葉～後葉頃の年代を与えておきたい。

（2）遺構の年代

前述のように、今回発見した遺構は基本層序Ⅲ層を挟んで、上層の遺構と下層の遺構に大別することができ、さらに灰白色火山灰の堆積状況や出土した遺物の年代より、下層のSX3061河川が9世紀初頭～中葉頃、上層のSK3060土壤が9世紀中葉～後葉頃のものと考えられる。また、Ⅲ層の年代については、灰白色火山灰が全く含まれていないことや、SX3061及びSK3060との関係から判断して、SX3061埋没後の9世紀中葉頃に堆積したものとしておきたい。

一方、南北大路についてみると、市川橋遺跡第27次調査の成果より、西側溝において表1のような対応関係を捉えることができる（註4）。年代についてはSD1768cを8世紀末～9世紀中葉頃、SD1768eを10世紀前葉～中葉頃、SD1768fを10世紀中葉頃としている。今回の調査では、SD3071bがSX3061河川跡と接続することから9世紀初頭～中葉頃、SD3071c埋土中に灰白色火山灰が二次堆積することから、SD3071c・dについては10世紀前葉以降であることが判明しており、年代的にも一致している。

S D3073東西溝はSD3071cと接続していることから、10世紀前葉以降の年代である。

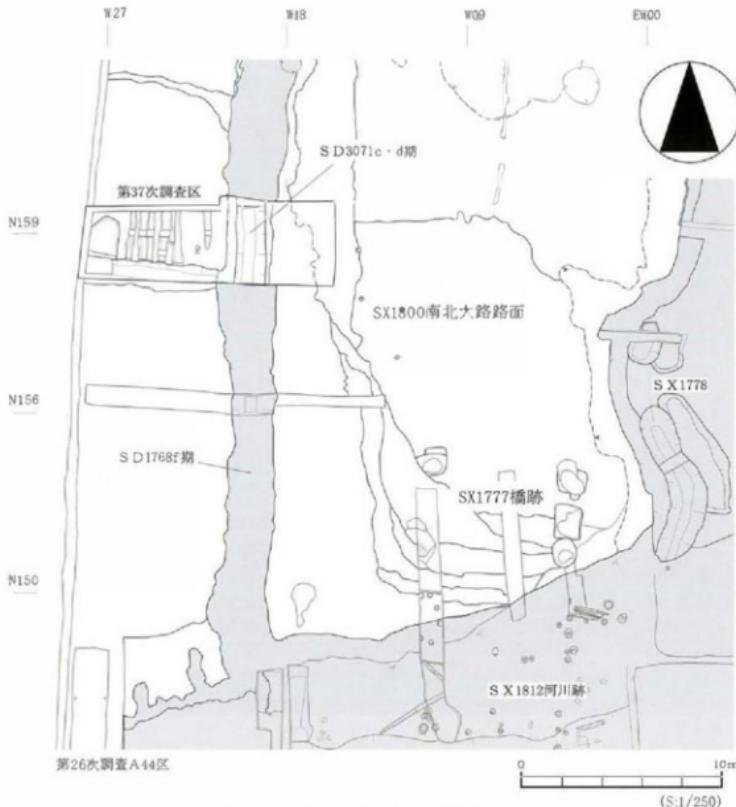
小溝群については、灰白色火山灰が自然堆積するものの（SD3062・3065）と、斑状に二次堆積するもの（SD3063・3064・3066・3067）がある。前者については9世紀後葉～10世紀前葉頃、後者については10世紀前葉以降と考えておきたい。

第27次SD1768西側溝	S D3071
a期：創建期	—
b期：	a期
c期：堆積最大	b期：SX3061と合流
d期：上層に灰白色火山灰 が自然堆積	—
e期	c期
f期	d期

表1

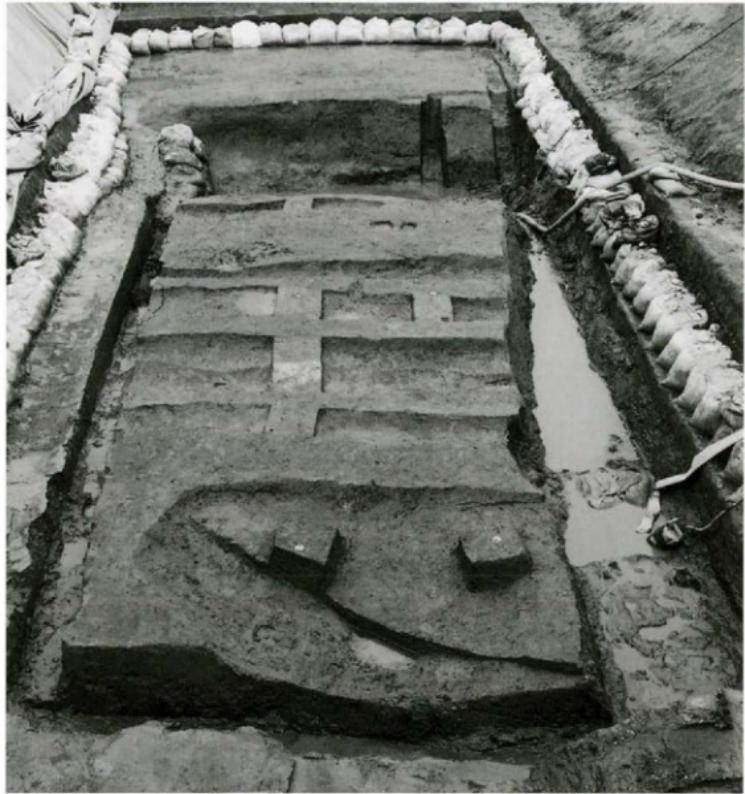
4.まとめ

- 城外の区画道路のうち、南北大路とその西側の一部を調査した。
- 南北大路では、4時期の変遷を確認した。このうちB期では9世紀初頭～中葉頃のSX3061河川跡と合流していることが明らかとなった。
- 今回の調査区では、南北大路建設当初の西側溝は確認することができなかった。

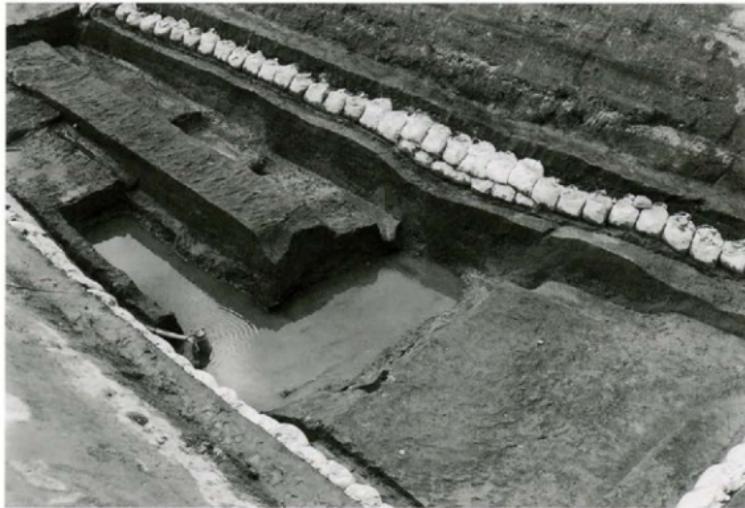


第20図 第37次調査区周辺遺構配置図

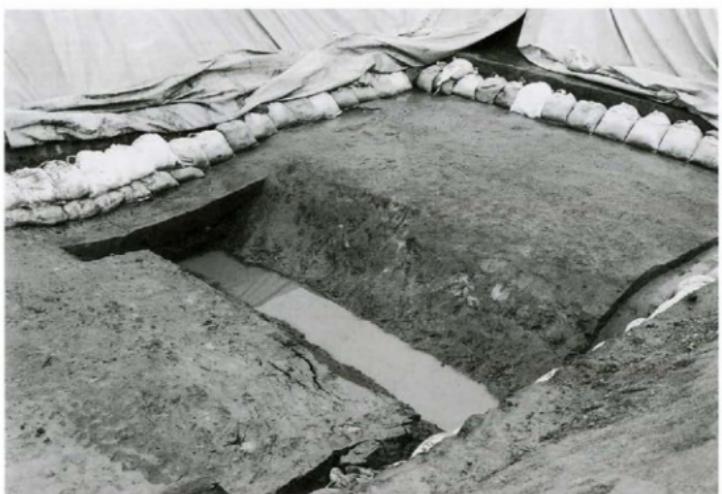
- (註1) SD1822 出土器の特徴としては、①土師罐杯にはA・B類があるが、A類は極めて少ない、②土師器B類は底部が削離後、再調整を施したもののが7割を占める、③土師器B類にはA・B類があり、A類が約2割、B類が約8割である、④須恵器杯では無調後II・V類が9割を占め、このうちII類が約7割、V類が3割である。また、須恵器杯については、径深指数が24~41の間に分布し、1層で26~33、2層で25~31周辺に集中すること、外傾度については21~42の間に分布し、1層で34~40、2層で31~36、38~42周辺に集中する傾向が認められる。(多賀城市教育委員会『市川川越跡一城南土地区画整理事業にかかる発掘調査報告書II』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003)。S X3061 河川跡出土遺物については、須恵器杯II類の占める割合が圧倒的であることや、外傾度がやや小さい点で相違するものの、相対的に見て同様であると判断した。
- (註2) 第11 廊柱出土跡では、①底盤/口径比が40~50前後、②底盤の切り離しが明かぬものはすべて回転式切り、③再調整されたものの占める割合が多いこと、第10 廊柱出土跡では、①底盤/口径比が36~46、径高比が27~38、②底盤の切り離しは圧倒的に回転式切りのものが多い、③#48は再調整されないものであるという特徴が描かれており(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究年報1991』1992)。これらと比較すると、SK2167出土土器類は概ね10~11層出土土器類の範囲におさまるものと考えられる。
- (註3) SK2167出土の須恵器杯では、ヘラ切りのものが47%、回転式切りのものが30%あり、全体の約8割を占めている。(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究年報1992』1993)
- (註4) 多賀城市教育委員会『市川川越跡一城南土地区画整理事業にかかる発掘調査報告書III』多賀城市文化財調査報告書第75集 2004



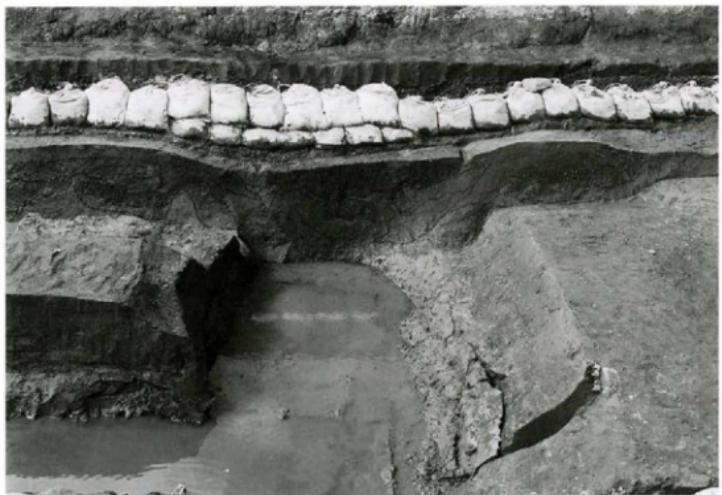
1 調査区全景 西より



2 調査区全景 南東より



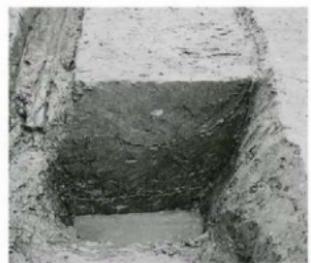
1 SX3070D南北大路 南西より



2 SD3071南北大路西側溝跡 南より



3 SK3060土壤断面 西より



4 SD3073溝跡断面 東より



1



2



3



4



5

6



7



8



9



10



11



12



13



14

- 1 SD3071d・2層出土 須恵系土器・高台付杯
(第6図10 R17 S:1/3)
- 2 SD3071c・1層出土 須恵系土器・杯
(第5図1 R28 S:1/3)
- 3 SX3061・2層出土 土師器・杯
(第13図1 R95 S:1/3)
- 4 SX3061・3層出土 須恵器・杯
(第14図2 R125 S:1/3)
- 5 SK3060・2層出土 須恵器・杯
(第9図5 R7 S:1/3)
- 6 SX3061・3層出土 須恵器・甕
(第16図1 R42 S:1/3)
- 7 SX3061・3層出土 土師器・杯
(第15図6 R106 S:1/2)

- 8 SX3061・1層出土 転用鏡 須恵器・杯
(第15図2 R50 S:1/2)
- 9 SX3061・3層出土 土師器・甕
(第15図8 R135 S:1/3)
- 10 SD3071d・1層出土 門面鏡
(第6図12 R14 S:1/2)
- 11 SX3061・3層出土 墨書き土器 土師器・杯
(第15図1 R119 S:任意)
- 12 SX3061・3層出土 墨書き土器 土師器・杯
(第15図3 R122 S:任意)
- 13 SX3061・3層出土 墨書き土器 土師器・杯
(第15図2 R121 S:任意)
- 14 SX3061・1層出土 墨書き土器 土師器・杯
(第12図1 R53 S:任意)

V 市川橋遺跡第38次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。今回の開発計画は基礎工事に纏式柱状改良工法をとることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、発掘調査実施の協力を地権者に求め、平成15年6月6日に承諾書の提出をうけたことから事前調査として実施した。なお、本調査地点は、城南土地区画整理事業に伴う第27次調査A4区に隣接していることから、古墳時代から平安時代にかけての河川跡の存在が当初より予想された。調査は6月24日から開始し、はじめに重機を使用して城南土地区画整理事業に伴う盛土(Ia層)・現代の水田層(Ib層)の除去を行い、灰白色火山灰粒を含むII層を検出した。26日からは作業員を動員してII層の除去を行い、遺物を包含する堆積層とその北辺に若干のピットを発見する。この堆積層の性格を把握するために調査区間に土層観察および排水溝を兼ねたサブトレンチをめぐらせた。平面・断面での土層観察の結果、

東西方向に流れる河川跡の北岸付近であることが判明した。堆積土中には土器等の遺物が比較的多量に含まれていることから、上層(S X3057B河川跡埋土)より掘り進めることとした。この作業と並行して北側に分布するS X3057A河川跡埋土上面で検出したピットの精査と平面・断面図の作成を行った。遺物は層ごとに取り上げ、7月16日までにはS X3057A河川跡埋土まで掘り進めた。翌日、調査区全景および土層断面の写真撮影、平面・断面図の作成を行い現地での調査を終了した。この後、直ちに埋め戻しを行う予定であったが、悪天候が続き8月4日に埋め戻しを行い一切の調査を完了した。

2. 調査成果

(1) 基本層序

今回の調査区で確認された基本層序は以下の通りである。

Ia層：区画整理に伴う盛土層で、層厚は1.7m。

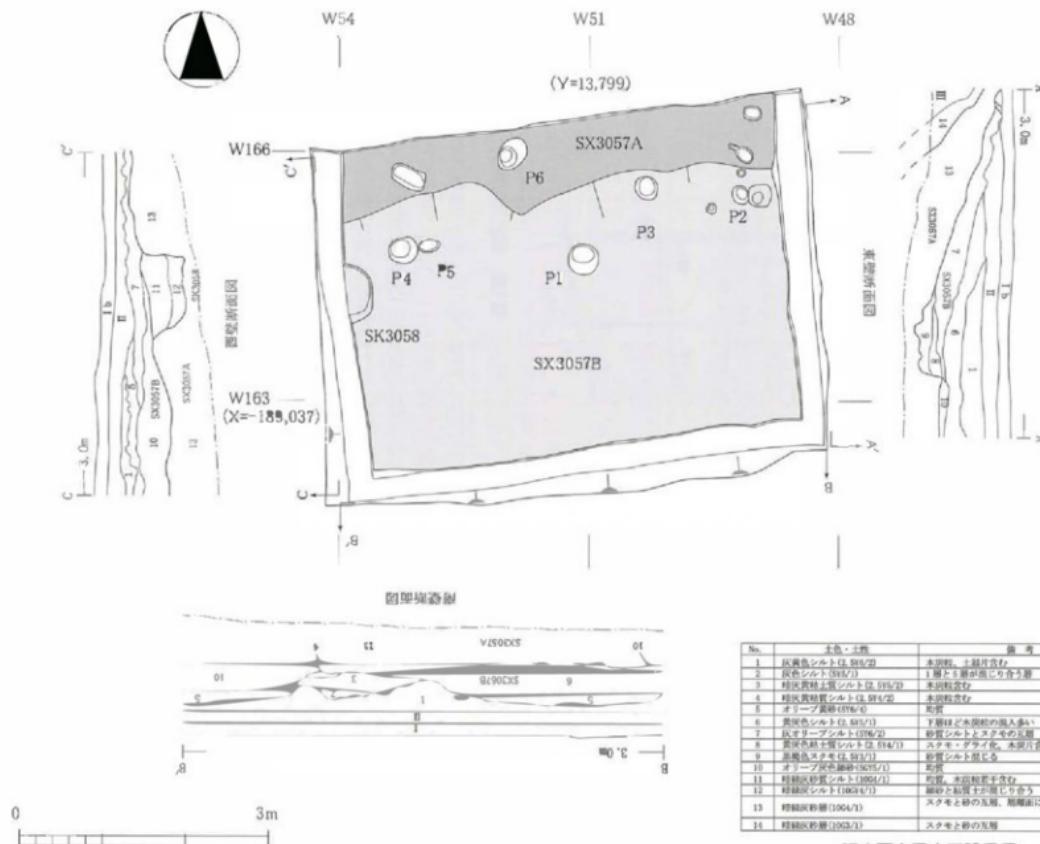
Ib層：現代の水田耕作土層で、層厚は15cm前後。

II層：褐色シルト(10YR4/1)で、層厚は10~20cm。調査区全域に分布し、灰白色火山灰粒を含むことから、10世紀前葉以降に堆積した土層。平安時代の河川埋土を覆う。

III層：浅黄色砂質土(5Y7/4)で、層厚は50cm以上。平安時代の河川埋土より古い。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構平面図・断面図

調査区内壁土層観察表

No.	土色・土性	備考
1	灰褐色シルト (2, 8/5/2)	本剖面、上部片含む SX3057B 上層
2	灰褐色シルト (3/5/2)	1層と2層が倒立合せ層 x
3	灰褐色粘土シルト (2, 8/5/2)	本剖面含む x
4	灰褐色粘土シルト (2, 8/4/2)	本剖面含む x
5	オリーブ墨綠色シルト (3/5/4)	本剖面 x
6	黄褐色シルト (2, 8/5/1)	下層ほど本剖面の陶器多い SX3057B 中層
7	灰オリーブシルト (3/5/2)	砂質シルトとスクモの互層 SX3057B 下層
8	黄褐色粘土シルト (2, 8/4/2)	スクモ・グリーン。本剖面含む x
9	黄褐色シルト (2, 8/3/2)	砂質シルト層に含む x
10	グリーンシルト (2/5/2)	本剖面 x
11	暗褐色粘土シルト (3/5/1)	砂質、木炭粒若干含む SX3058 上層
12	暗褐色シルト (3/5/4/1)	砂質と粘土層倒立合せ層 x
13	暗褐色粘土 (10/4/1)	スクモと砂の互層、断面中に木炭層が入る SX3057A 剤上
14	暗褐色粘土 (10/3/2)	スクモと砂の互層 x

(2) 発見構造と遺物

S X3057 河川跡：ほぼ同位置で2時期（A→B期）の変遷を確認した。以下古い順に説明する。

S X3057A 河川跡（第3～5図）

東西約6m、南北約4.5mの調査区全域で検出した東西方向に流れる河川跡である。B期の埋土ではほぼ全面を覆われている。SK3058と重複しておりこれより古い。深さは0.6m以上、埋土は2層に分けられ、いずれもスクモ（木炭粒と遺物を含む）と砂の互層である。北岸の立ち上がりはB期に比べ角度を持って傾斜する。なお、A期河川跡の底面までは完掘していがない。

遺物は埋土（13層）より土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯・蓋・鉢・高杯・瓶・長頸瓶・甕・丸瓦（II a類・II B a類）・平瓦（II B類・II B a類）、墨書き土器・人面墨書き土器・製塩土器・木筋状木製品・齊串・糸巻き・挽物・鉈具・金具？・砥石・剝片（黒曜石製）が出土し、須恵器の量が最も多い。土師器杯は21点中、B I類が48%、B II類が52%と約半々の割合である。土師器甕はA類とB類のものとがあるが、後者の量が圧倒的に多い。B類のものには体部上半にタタキ痕を残すものもある（この痕跡はB期出土の甕にもみられる）。須恵器杯は96点中、I類・6%、II類・5%と少量であり、III類が89%とほぼ9割を占める。底径／口径比では、図示した坏で見た場合50～67の間に分布する。平均は58である。

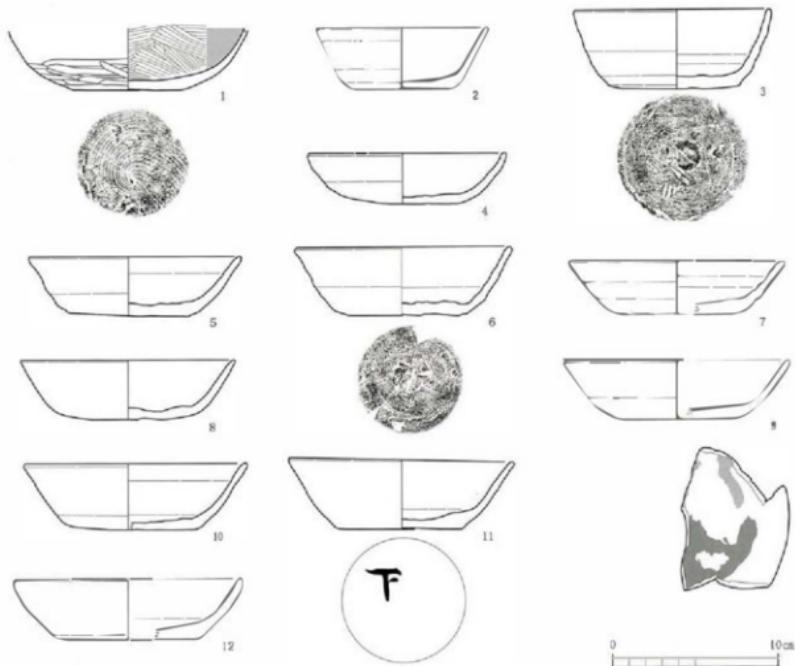
S X3057B 河川跡（第5～7図）

A期と同様調査区全域で検出した。II層によって全面を覆われている。SK3058と重複しておりこれより新しい。深さは0.6～0.8mを計る。北岸の立ち上がりは緩やかに傾斜する。埋土は大別すると3層に分けられ、上層（1～5層）、中層（6層）、下層（7～10層）となる。上層は木炭粒を含む灰黄色シルトとオリーブ黄色沙質土からなる。中層は下にいくほど木炭粒の混入が多い黄灰色シルト。下層は灰オリーブシルトとスクモの互層である。

下層から出土した遺物には、土師器杯・鉢・甕・瓶・須恵器杯・高台付杯・双耳杯・積碗・双耳鉢・鉢・蓋・高杯・瓶・小瓶・甕・軒丸瓦（重弁蓮華文）・丸瓦（II類・II B類）・平瓦（II B類）、墨書き土器・人面墨書き土器・漆付着土器・漆器（箱）、カマド形土器・転用硯・砥石・鉄滓（削底滓）がある。土師器杯は25点中、B I類が19%、B II類が81%である。この内、B I類に底部が回転糸切り一体部下端回転へラケズリ調整で、内面に回転ヘラミガキ調整を施すものが1点認められた。須恵器杯は152点中、III類が94%を占め、残りがI類・4%、II類・1%であるが、わずかに1点V類（1%）が認められた。底径／口径比では、図示した坏で見た場合49～64の間に分布する。平均は55である。

中層から出土した遺物には、土師器杯・鉢・甕・瓶・須恵器杯・高台付杯・蓋・高杯・瓶・小瓶・長頸瓶・甕・丸瓦（II A類）・平瓦（I A類・II B a類）、墨書き土器・ヘラ描き土器・漆付着土器がある。土師器杯は6点中、B I類・B II類がそれぞれ半々を占める。この内、B I類に内面調整が回転ヘラミガキを施すものが2点認められた。須恵器杯は43点中、III類が74%で、他はI類・5%、II類21%である。底径／口径比では、図示した坏が2点と少ないが50と56である。

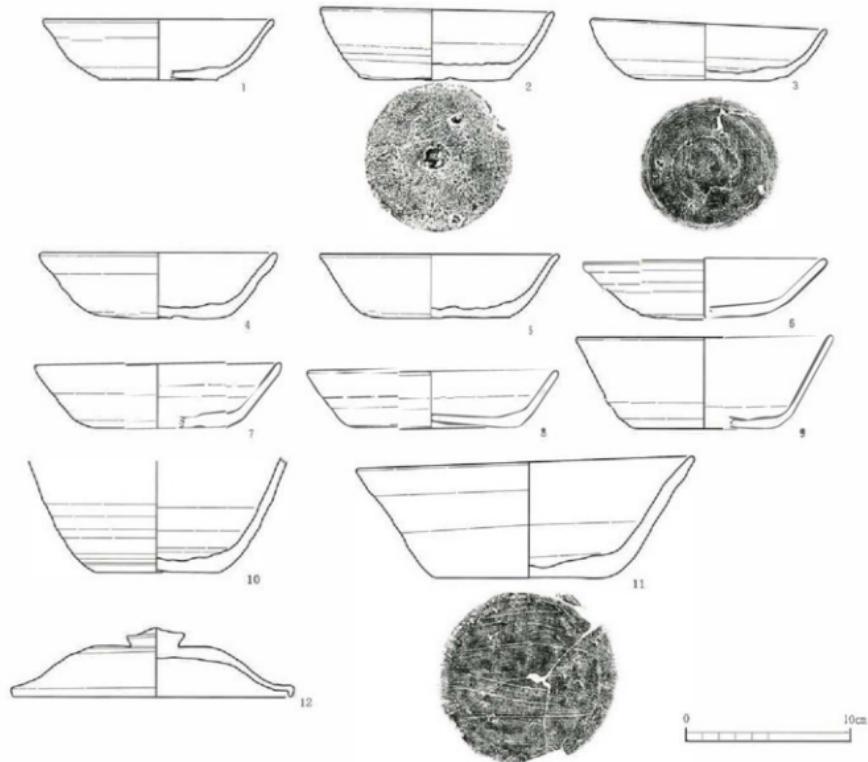
上層から出土した遺物には、土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯・高台付碗・蓋・瓶・長頸瓶（甕Gを含む）・甕・灰釉陶器・転用硯・丸瓦（II類）・平瓦（II B類・II B a類）、墨書き土器・カマド形土器・製塩土器・土器片製円盤・砥石・鉄滓がある。土師器杯は75点中、B I類が29%、B II類が39%、BV類が32%で構成される。須恵器杯は139点中、III類が86%、I・II類が2%、V類が12%認められる。底径／口径比では、図示した坏が2点と少ないが44と61である。



単位(cm)

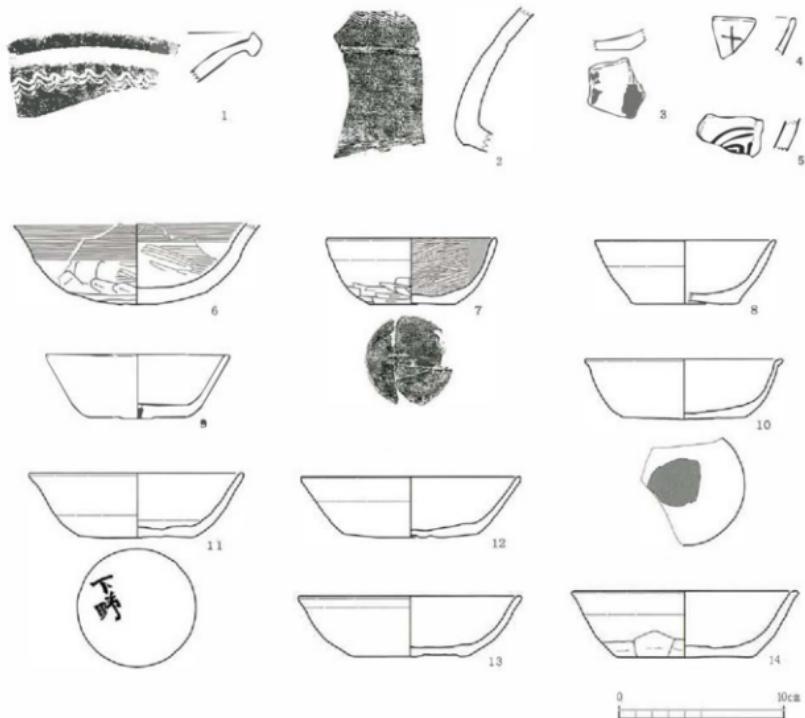
番号	種類	測定・場所	外観		内径 横幅	底径 横幅	脚高	半真圓形	壁厚	深さ
			片面	対面						
1	土器部・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面下平、中央もへ ロケビツ 直徑:14.5mm	ヘラボシム、黒色光澤	-	5.4	-	R15	細口瓶	
2	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(16.5) 4.5/24	7.5/24	2.8	R15	細瓶	
3	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(11.9) 22/24	6.0 24/24	4.8	2~3	R7	細瓶
4	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(12.0) 5/24	7.4 24/24	3.1	R15	細瓶	
5	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(12.9) 4/24	7.6 24/24	3.7	R15	細瓶	
6	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(12.2) 15/24	7.0 24/24	4.2	2~2	R15	細瓶
7	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(13.0) 5/24	7.4 11/24	3.3	R5	細瓶	
8	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(13.0) 5/24	7.0 7/24	2.5	R170	細瓶	
9	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(12.6) 3.5/24	7.2 11/24	3.6	R15	細口瓶に近似する 直筒	
10	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(12.5) 4.5/24	7.0 8/24	4.1	R7	細瓶	
11	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(12.2) 13/24	7.0 8/24	4.4	2~3	R74	直筒外周に墨書き「下」、 外面部地縫付着 細瓶
12	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナゲ、底面:へラ切り	ロクロナゲ"	(13.8) 5/24	9.1 6/24	3.7	R5	細瓶	

第3図 SX3057A河川跡出土遺物(1)



番号	種類	口径・底径	等 階		口徑 横径率	底径 横径率	底高	等高法面	等高面番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(14.0) 6.5/24	(7.0) 11/24	3.7		E18	粗面
2	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(14.2) 13/24	9.2 24/24	4.4	2~6	E13	粗面
3	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(14.4) 14/24	8.4 26/24	3.8	2~6	E14	粗面
4	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(14.5) 7.5/24	(8.6) 20/24	4.0		E17	粗面
5	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(14.6) 4/24	(8.2) 18/24	3.9		E16	粗面
6	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(14.8) 3/24	(7.8) 9/24	3.5		E14	粗面
7	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(15.1) 2/24	(8.0) 8/24	3.9		E13	粗面
8	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	(15.3) 14/24	(8.9) 14/24	3.6	2~6	E17	粗面
9	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り→等 高もへラケヌリ	ロクロナゲ"	(15.4) 3/24	(8.7) 7/24	3.6		E20	E1x 等
10	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り	ロクロナゲ"	—	(8.7) 12/24	—		E14	粗面
11	須恵器・杯	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、底器:ヘラ切り→等 高もへラケヌリ	ロクロナゲ"	(23.5) 20/24	(11.5) 23/24	7.5	2~7	E12	E1x 等
12	須恵器・盃	SX3057A・楕土	ロクロナゲ、又井器:臼輪ヘラケ ヌリ	ロクロナゲ"	(17.3) 9/24	(3.5) 21/24	4.2	2~6	E22	

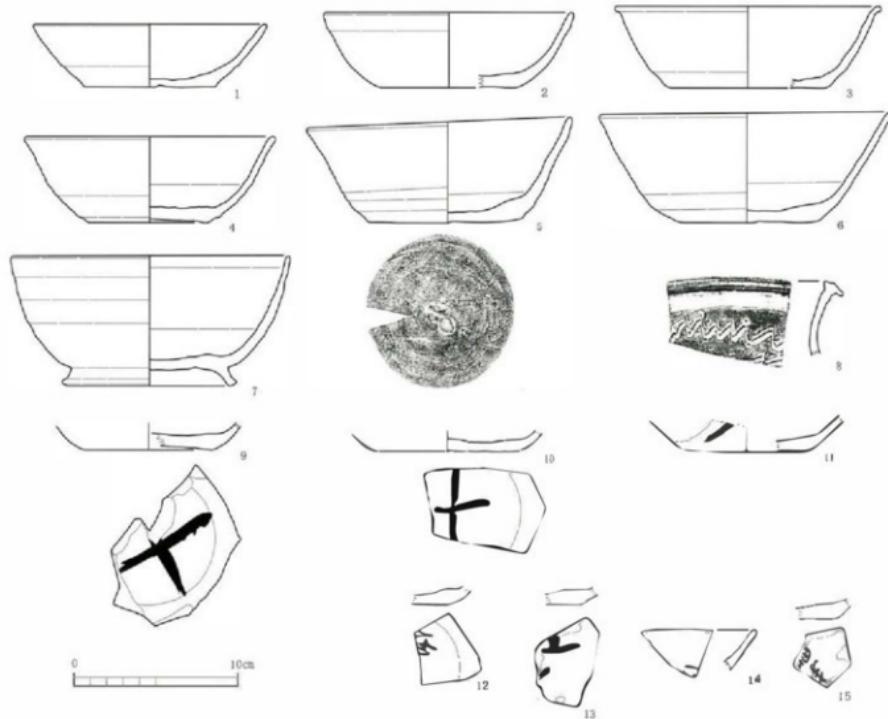
第4図 SX3057A河川跡出土遺物(2)



単位(cm)

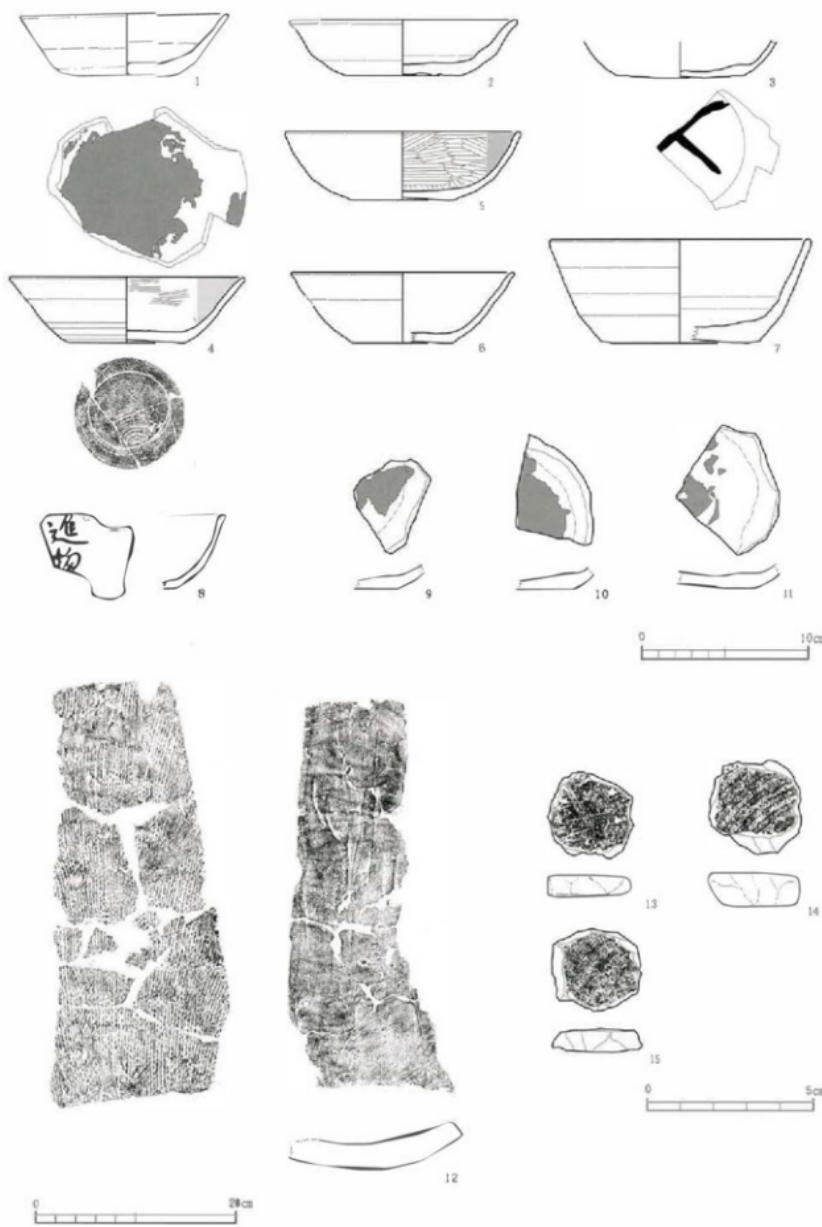
番号	種類	遺跡・層位	形 塵		口径 横幅	底径 横幅	断面	年代表記	登錄番号	備 考
			外観	内観						
1	漠物器・骨	SX3057A・堆土	ロクロナデ、細縫式文	ロクロナデ	—	—	—	—	823	
2	漠物器・骨	SX3057A・堆土	ロクロナデ、細縫式文	ロクロナデ	—	—	—	—	824	
3	土師器・杯	SX3057A・堆土	ロクロナデ、手打ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色釉面	—	—	—	—	826	底部外周に墨書き「口」印
4	土師器・杯	SX3057A・堆土	ロクロナデ	ヘラミガキ、黑色釉面	—	—	—	—	828	外周に墨書き「十」
5	土師器・甕	SX3057A・堆土	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	—	827	体表外周に人面彫像
6	土師器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、手打ちヘラケズリ	ロコナデ、ヘラミガキ	(16.4)	(3.3)	4.1	8108	古墳時代中期	
7	土師器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、手打ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黑色釉面	16/24	16/24	—	—	846	3号瓶
8	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部:ヘラ切打	ロクロナデ	(17.5)	(3.3)	3.9	837	山瓶	
9	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部:ヘラ切打	ロクロナデ	(16.1)	(6.1)	3.9	840	山瓶	
10	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部:回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(19.6)	(7.4)	3.7	845	底部外周に墨書き「十」	
11	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部:ヘラ切打	ロクロナデ	(12.9)	7.3	3.6	2-16	844	底部外周に墨書き「下野」印
12	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部:ヘラ切打	ロクロナデ	(13.4)	(8.2)	3.7	8129	山瓶	
13	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部:ヘラ切打	ロクロナデ	(13.6)	(8.2)	3.7	843	山瓶	
14	漠物器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、舟形下平:底部:手 内打ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.8)	(8.4)	4.1	895	山瓶	

第5図 SX3057A・B河川跡出土遺物(1)



番号	種類	遺跡・層位	外観		寸法 (横幅 × 深さ × 厚さ)	断面 (横幅 × 厚さ)	表面 (横幅 × 厚さ)	底面 (横幅 × 厚さ)	基部 (横幅 × 厚さ)	参考
			外側	内側						
1	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(14.2) 5.74 3.524	8.0 6.2 6.20	—	—	—	■直腹
2	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(15.2) 4.524 6.20	8.2 6.6 6.20	—	—	—	■直腹
3	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(16.0) 4.524 6.24	8.6 6.6 6.24	—	—	—	■直腹
4	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(16.3) 11.21 20.21	8.3 6.3 6.21	—	—	—	■直腹
5	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(16.0) 14.21 23.24	8.3 6.6 6.24	—	—	—	■直腹
6	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(17.4) 12.21 24.21	8.6 6.6 6.21	—	—	—	■直腹
7	須恵器	河原付近	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	(17.6) 13.924 18.74	8.6 6.6 6.74	—	—	—	■直腹
8	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、縦横施籠文	ロクロナギ	—	—	—	—	—	■縦横
9	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	— 11.21	— 6.11 6.21	—	—	—	■縦横外腹に墨書き「十」
10	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	— 10.62 6.21	— 6.6 6.21	—	—	—	■縦横
11	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	— 17.30 7.74	— 7.30 7.74	—	—	—	■縦横外腹に墨書き「口」
12	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	— 16.62 6.21	— 6.6 6.21	—	—	—	■縦横
13	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	—	—	—	—	—	■縦横
14	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ	ロクロナギ	—	—	—	—	—	■縦横外腹に墨書き「口」
15	須恵器 - 杯	SX3057B・下層	ロクロナギ、底部: ヘラ切り	ロクロナギ	—	—	—	—	—	■縦横外腹に墨書き「口」

第6図 SX3057B河川跡出土遺物(2)



第7図 SX30578河川跡出土遺物(3)

単位(cm)

番号	種類	遺跡・層位	種別		直径 横径	高さ 西側	周長	表面風化	壁厚さ	調査
			外径	内径						
1	須恵器・杯	SX3057B・中層	ロクロナダ、底面:ヘラ切り	ロクロナダ	(12.7) 21.24	7.2 24.24	3.3	2-10	86	Ⅲ類
2	須恵器・杯	SX3057B・中層	ロクロナダ、底面:ヘラ切り	ロクロナダ	(12.4) 9.24	7.2 22.24	3.4		833	底面外側に墨書き「十」 Ⅲ類
3	須恵器・杯	SX3057B・中層	ロクロナダ、底面:ヘラ切り	ロクロナダ	— 9.24	7.0 21.24	—		864	Ⅲ類
4	土器鉢・杯	SX3057B・上層	ロクロナダ、底面:回転木切	ヘラミガキ、底面:回転木切	(14.2) 21.24	7.0 24.24	4.0	2-11	855	内面に揮毫記 Ⅰc類
5	土器鉢・杯	SX3057B・上層	ロクロナダ、底面:回転木切	ヘラミガキ、底面:回転木切	(14.3) 8.24	6.0 12.24	4.2		856	IV類
6	須恵器・杯	SX3057B・上層	ロクロナダ、底面:回転木切	ロクロナダ	(13.4) 6.24	(6.2) 10.24	4.3		870	Ⅳ類
7	須恵器・杯	SX3057B・上層	ロクロナダ、底面:ヘラ切り	ロクロナダ	(15.7) 8.24	(9.4) 11.24	5.2		8107	Ⅳ類
8	土器鉢・杯	レII	ロクロナダ、底面:回転木切	ヘラミガキ、底面:回転木切	—	—	2-15		8120	須恵器外側に墨書き「連物」 Ⅰ類
9	私用器	SX3057B・上層	ロクロナダ、底面:回転木切	ロクロナダ	—	—			8555	須恵器私用、底面あり
10	私用器	SX3057B・下層	ロクロナダ、底面:ヘラ切り	ロクロナダ	—	—			8556	須恵器私用、底面あり
11	私用器	SX3057B・下層	ロクロナダ、底面:ヘラ切り	ロクロナダ	—	—			8554	須恵器私用、底面あり
12	平瓦	SX3057B・上層	薄タタキ	瓦	—	—			8136	Ⅲ類
13	土器片脚内側	SX3057B・上層	ヘタケメリ		直径 2.5	厚さ 0.6	底 5.6		867	土器片脚の脚内側
14	土器片脚内側	SX3057B・上層	回転木切		—	—	—		855	土器片脚の脚内側
15	土器片脚内側	SX3057B・上層	ロクロナダ		—	—	—		855	土器片脚の脚内側

第7図 出土遺物観察表

SK3058 土壇

調査区西壁際のS X3058A埋土上面で検出した。重複関係からS X3058Aより新しく、S X3058Bより古い。西側は調査区外へと延びており全体を確認できなかつたため平面形態は不明である。規模は1m×0.65m以上で、深さ 0.5mを計る。北壁は垂直に近く立ち上がるが、南壁はそれに比べて緩やかである。底面は南に向かって傾斜する。埋土は2層に分けられ、いずれもグライ化した暗緑灰色シルトである。遺物は土師器杯（B II類）、須恵器杯（III類）が若干出土している。

柱穴およびピット

11基発見し、ほとんどがS X3058A・B埋土上面で検出した。このうち2基で柱痕跡、1基で抜き取り穴を確認したが、規模が一様ではなく建物としての構成も不明である。遺物は土師器杯・壺、須恵器杯・壺、平瓦が出土している。土師器杯はB II類を主体とするが、B V類も1点確認された。須恵器杯はすべてIII類で占められている。

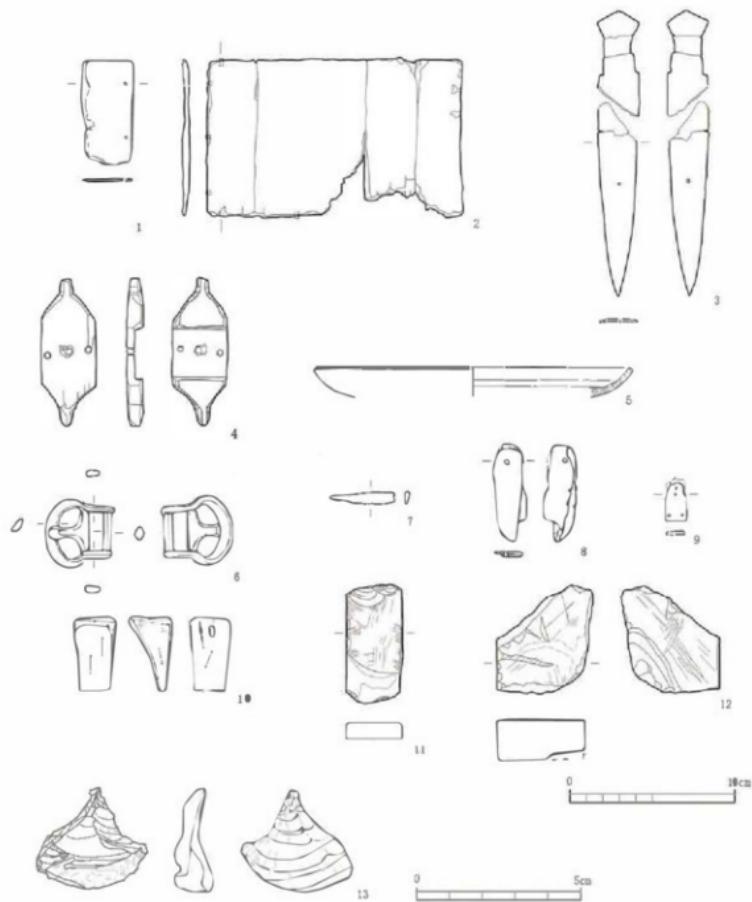
(3) II層出土の遺物(第7図8)

II層から出土した遺物には、土師器杯・高杯・壺・壺、須恵器杯・高台付杯・双耳杯・盤・瓶・長頸瓶・壺、須恵器系土器杯・灰陶器・丸瓦（II類・II B類）・平瓦（IA類・II B類）・墨書き土器・製塩土器・鐵滓がある。土師器杯は28点中、B V類が57%で、他は再調整が施されるB I・II類である。須恵器杯は41点中、III類が68%、V類が29%、再調整のものはごく微量である。

3. 考 察

はじめに、河川跡出土資料をもとに多賀城跡出土資料と比較を行い、その年代を検討する。

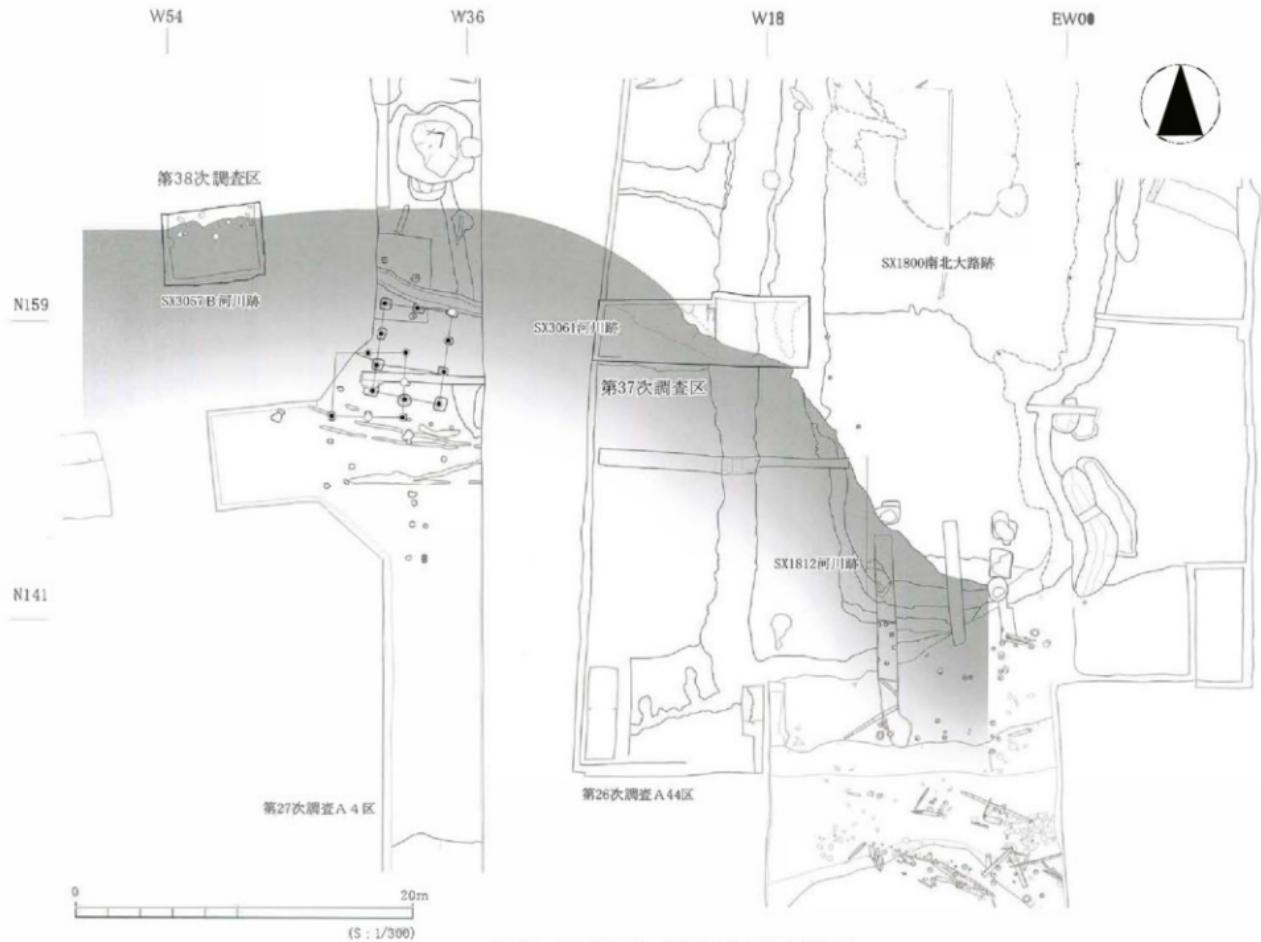
まず、上限年代について検討する。S X3057A出土土師器杯の構成比は、前述の通りB I類とB II類が約半々の割合である。これとほぼ同じ数値を示すのが大塚地区的S I 2153, 2160出土土器群であり、年代は9世紀初頭～前葉とされている。須恵器との対比でも同段階が9割方III類で構成され、V類を含まない



単位(cm)

番号	被單	遺物・場所	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登錄番号
1	木製品・漆器鉢	SX3057B・下層	6.3	3.1	0.2	目釘穴あり 2の側板	3-1	R6
2	木製品・漆器鉢	SX3057B・下層	15.5	9.5	0.5	側面に目釘あり。1と組み合う	3-2	R5
3	木製品・漆器	SX3057A・堆土	—	2.5	0.2		3-4	R2
4	木製品・漆器	SX3057A・堆土	9.0	3.3	1.0	目釘1ヶ所存	3-3	R3
5	木製品・漆器盤	SX3057A・堆土	—	—	—			R4
6	木製品・鉈具	SX3057A・堆土	4.2	4.2	0.9		3-5	R1
7	木製品・刀子	P-1・堆土	4.0	0.7	0.2			R4
8	不明木製品(縫合?)	SX3057A・堆土	5.9	2.0	0.5	2枚の木製品が目釘で留められている		R3
9	不明木製品(金具?)	SX3057A・堆土	2.6	1.3	0.2	痕跡なし(孔あり)		R2
10	石製品・鉈石	SX3057B・上層	4.4	2.5	2.6	貫通孔あり、鉈面4面、鋸刃状	3-7	R11
11	石製品・鉈石	SX3057B・下層	7.1	3.4	1.0	鉈面2面、黑色粘板岩	3-8	R112
12	石製品・鉈石	SX3057A・堆土	6.0	5.1	2.5	鉈面4面		R113
13	石製品・鉈片	SX3057A・堆土	3.1	3.4	1.2	重複# : 5.0g. 黒曜石製(漆/漆器)	3-6	R33

第8図 SX3057A・B、ピット出土遺物(木製品ほか)



第9図 9世紀初頭～中葉頃の河川流路推定図

点で共通する（註）。

次に、下限年代を検討するためにSX3057B上層土器についてみてみる。多賀城跡出土の土師器杯におけるBV類の割合は、9世紀第2四半期の大畠地区S E2101Bが4%、9世紀中葉の大畠地区SK2167が20%、9世紀第3四半期の大畠地区SK2272が44%であり、時期が新しくなるにつれて増加していることが見て取れる。この比率からすると本上層出土土師器杯は、大畠地区SK2167に近いものといえる。また、土師器と須恵器の組み合わせの点では、9世紀中葉段階から須恵器が減少傾向になり、大畠地区SK2167を例にとって見ると、土師器72.4%、須恵器27.6%となっており、供膳具の主体がこの時期から土師器へと転換している。これを参考にするならば、SX3057B上層土器の割合は、依然須恵器が半数以上（7割）を占めており、9世紀中葉段階よりは古い様相を呈している。

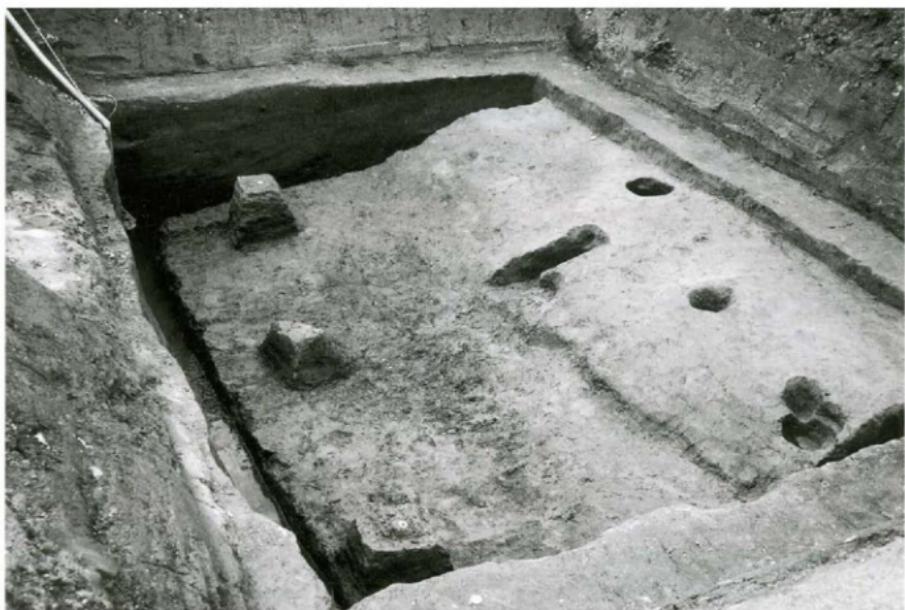
これまでの検討で土師器と須恵器との間には若干の時間のずれが生じている。これは土師器BV類が多賀城跡では9世紀中葉頃に一定量存在することを根拠としたためである。しかし、近年の城南地区的調査ではBV類が1割程度、8世紀末から9世紀初頭あるいはそれ以前の時期に確認されており、BV類の比率については、遺跡・遺構ごとに流動的な側面があり今後検討を要する。以上のことから、SX3057A・Bの存続期間は9世紀初頭から中葉頃と推定しておきたい。

今回の調査区で発見した河川跡は、東側に隣接する第27次調査区（SX1812）やさらにその東側の第37次調査区（SX3061）でも確認されている（第9図）。この河川跡は当時の多賀城南面を流れる主要な河川であり、南北大路の西側構と接続し、これを横切るように東流していた。これまでの城南地区的調査成績によると、古墳時代中期から10世紀中葉頃にかけてこの河川は、ほぼ同位置で存続していたことが判明しており、今回の調査によって9世紀前半代の河川北岸の位置を明確に把握することができた。

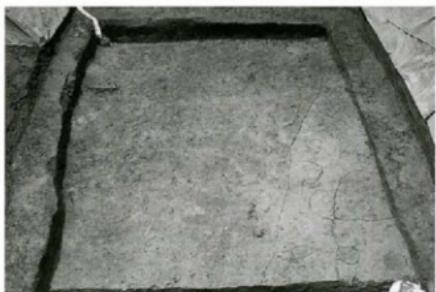
（註）須恵器V類は、城南地区的報告において8世紀末から9世紀初頭とされているSX1351C期河川跡に6%含まれていることから、8世紀末から9世紀中葉にかけて徐々に増加していったことが想定されるが、9世紀初頭～前葉の大畠地区S E2153, 2160では検出されておらず、遺跡・遺構単位で探査が異なるものと考えられる。

【引用・参考文献】

- 宮城県多賀城跡調査研究会「第60・61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究会年報1991』1992
宮城県多賀城跡調査研究会「第62・63次調査」『宮城県多賀城跡調査研究会年報1992』1993
宮城県多賀城跡調査研究会「第65次調査・現状歴史に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究会年報1994』1995
白鳥良一「多賀城跡出土土器の復元」『研究記要V』宮城県多賀城跡調査研究会1980
村田晃一「土器からみた官衙の純末」『古代官衙の純末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会資料1994
村田晃一「宮城跡における10世紀前後の純末」『福島考古』第36号1995
多賀城市教育委員会「市川橋遺跡－城南土地区適應理事室に係る発掘調査報告書I－」多賀城市文化財調査報告書第60集 2001
多賀城市教育委員会「市川橋遺跡－城南土地区適應理事室に係る発掘調査報告書II－」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
柳原和明「東北の施釉陶器－陸奥を中心として」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 地域陶器』古代の土器研究会 1994



1 SX 3075A 河川跡全景 南東より



2 SX 3075A・B 河川跡検出状況 東より



3 調査区東壁土層断面



4 調査区西壁土層断面



5 SK 3058土壌土層断面



1



2



3



4



5



6



7



8



9



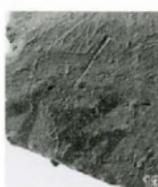
10



11



12



13



14



15



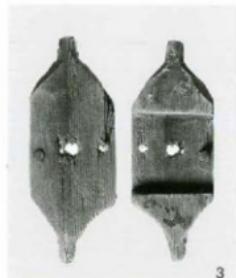
16

- 1 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第3図3 R7 S:1/3)
2 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第3図6 R10 S:1/3)
3 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第3図11 R74 S:1/3)
4 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第4図2 R3 S:1/3)
5 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第4図3 R8 S:1/3)
6 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第4図8 R47 S:1/3)
7 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第4図11 R12 S:1/3)
8 S X3057A・埋土出土 須恵器・杯
(第4図12 R22 S:1/3)

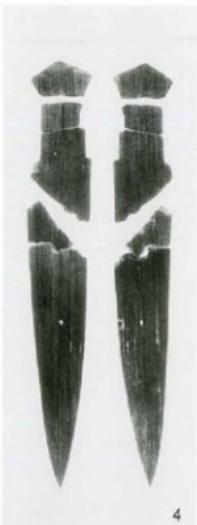
- 9 S X3057B・下層出土 須恵器・杯
(第6図5 R36 S:1/3)
10 S X3057B・中層出土 須恵器・杯
(第7図1 R61 S:1/3)
11 S X3057B・上層出土 土師器・杯
(第7図4 R85 S:1/3)
12 S X3057A・埋土出土 人面墨書き土器
(第5図5 R27 S:任意)
13 S X3057B・下層出土 墨書き土器
(第6図12 R55 S:任意)
14 S X3057B・下層出土 墨書き土器
(第6図15 R83 S:任意)
15 II層出土 墨書き土器
(第7図8 R120 S:任意)
16 S X3057B・下層出土 墓書き土器
(第5図11 R44 S:任意)



1



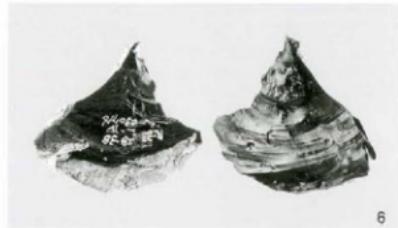
2



3



5



6



7



8

- 1 SX3057B・下層出土 漆箱 (第8図1 R6 S:1/2)
- 2 SX3057B・下層出土 漆箱 (第8図2 R5 S:1/2)
- 3 SX3057A・埋土出土 組巻 (第8図4 R3 S:1/2)
- 4 SX3057A・埋土出土 斧串 (第8図3 R2 S:1/2)
- 5 SX3057A・埋土出土 鉢具 (第8図6 R1 S:1/1)
- 6 SX3057A・埋土出土 剥片 (第8図13 R33 S:1/1)
- 7 SX3057B・上層出土 砥石 (第8図10 R111 S:1/1)
- 8 SX3057B・下層出土 砥石 (第8図11 R112 S:1/1)

VI 市川橋遺跡第三七・三八次調査出土の
下篇

木簡について

第一一五号木簡 (183)×41×6 039 SX3061 3層
「信夫郡稅春米五十

「信夫郡稅春米五斗」

木簡は第三・七次調査において五点(第一一二四一・二八号)、第三八次調査において一点(一一九号)出土した。使用した篆文の符号や型式番号等は、木簡学会が定め「木簡研究」等で使用している方式に従つた。また、木簡番号については、市川橋遺跡出土木簡の一連の番号である。図版および実測図の縮尺はいずれも約1/2である。

上端は一部欠損するほかは原形をとどめ、下端は欠損している。左右両側面も一部欠損するが原形をとどめる。材は全体的に腐食が進んでおり、表面も荒れがはなはだしいが、オモテ面のみ表面を平滑に調整し、ウラ面は無調整であることが確認できる。

信夫郡から運上された春米五斗に付けられた賣進物荷札である。信夫郡は現在の福島市域に比定されており、郡家は福島市五老内町に所在したとされる。

第一四号木簡 149×22×7 032 SX3061 3層

小川郷丈マ兄万呂三斗真与二斗

完形。上端・下端ともに刃物によるキリオリ痕を確認することがで
きる。表面はオモゼア・クラレ^ル・平滑^{ヒツク}に調整^{セイジ}して^ル。

小川郷から進上された米五斗の貢進物荷札である。小

小川郷から進上された米五斗の貢進物荷札である。小川郷は『和名

類聚抄」によれば安積郡に所在（名古屋市立博物館本は「小河」につ

くるし、現在の福島県郡山市田村町小川から中田町柳橋一帯に比定されている。

〔須力〕

「大ママ兄万呂」が三斗、「真与」が二斗それぞれ輸納し、合計五斗すなわち一俵に付けられたものである。「真与」のウジ名は兄万呂と同じ「大ママ」であつたため省略されたと考えられよう。

上端・下端および右側面は原形をとどめるが、左側面は欠損している。右側面には切り込み等の加工が施されていないことから、本木簡は現況よりも幅広の短冊形の木簡であることが想定される。

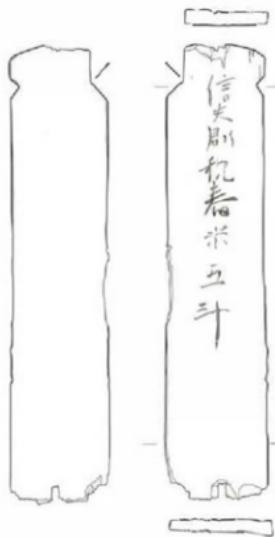
墨書きはオモテ・ウラ両面に確認することができる。オモテ面は三行

第一二六号大簡 233×(27)×4 011 SX3061 3層
[書生文部廣道]

〔薄力〕右 右〔
〔蓄力〕右



第114号木簡



0 5 10cm

第115号木簡

ほどの墨書きが確認できる。三行目は文字の左半分が切れている。ウラ面は二行ほどの墨書きが確認できる。両面ともに「い」と「う」薄く削られており、その削り残りと思われる墨痕も多数確認できる。厚さは最大で四畳であるが、最も薄い部分は約一畳と半分の厚さである。また、重なり合っている墨書きもある」とから、繰り返し使用された習書木簡とも推測されるが、詳細は不明とせざるを得ない。

第一一九号木簡 271×11×7 032 SX3057A 埋土
「
」

上端は右隅を欠損するが原形をとどめ、下端は欠損する。左右両側面は原形をとどめる。表面はオモテ・ウラとともに平滑に調整している。墨書きはオモテ面にのみ確認することができる。六~七文字程度の墨書きであるが、詳細は不明とせざるを得ない。

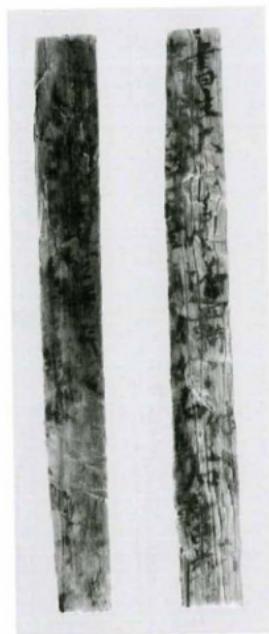
第一一七号木簡 (154) × 39×4 019 SX3061 3層
「□□□□□[]」

上端は右隅を欠損するが原形をとどめ、下端は欠損する。左右両側面は原形をとどめる。表面はオモテ・ウラとともに平滑に調整している。墨書きはオモテ面にのみ確認することができる。六~七文字程度の墨書きであるが、詳細は不明とせざるを得ない。

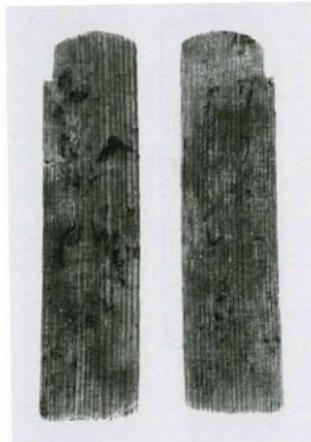
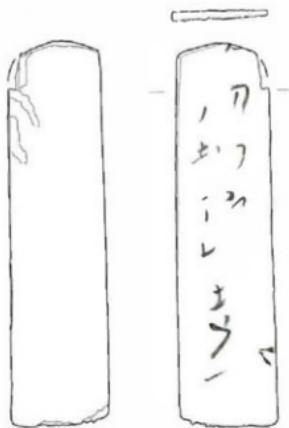
墨書きは確認できない。墨書きはないが切り込みのある木材に対しては、木筒状木製品・付札状木製品などと称して木筒の未使用品と捉える場合と、木筒以外の何らかの木製品と捉える場合がある。本木筒の場合、切り込みがあるほか、上端も面取りの加工が施されている」となどから、現段階では木筒として位置づけておきたい。

第一一八号木簡 091 SX3061 3層
赤赤□

削り屑。三文字分の墨書きを確認する「い」と「う」ができる。上二文字は同字であり、三文字目も同字の可能性がある。



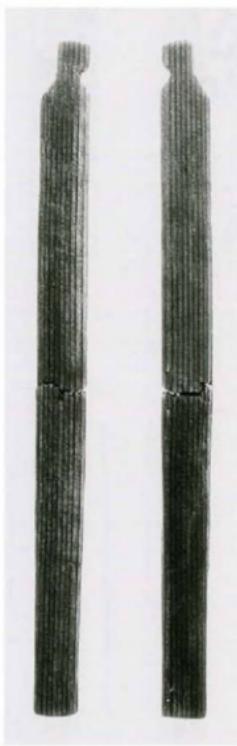
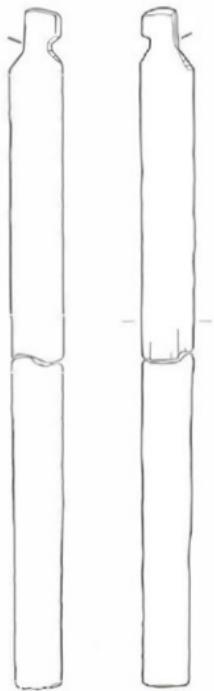
第116号木簡



第117号木簡



第118号木简



第119号木简

報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき						
書名	市川橋遺跡						
副書名	市川橋遺跡第34・35・37・38次調査						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第74集						
編著者名	島田 敬・相澤清利・武田健市・村松 稔・廣瀬真理子						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央2丁目27番1号						
発行年月日	西暦2004年3月31日						

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちかわばしいせき 市川橋遺跡 (第34次調査)	みやぎけん 宮城県 たがじょうし 多賀城市 いちかわあざごうのい町 市川字鴻ノ池地内	42099	18008	38度 17分 46秒	140度 59分 28秒	20030408 ~	15m ²	個人住宅建設
いちかわばしいせき 市川橋遺跡 (第35次調査)	みやぎけん 宮城県 たがじょうし 多賀城市 いちかわあざごうのい町 市川字鴻ノ池地内	42099	18008	38度 17分 47秒	140度 59分 30秒	20030409 ~	96m ²	個人住宅建設
いちかわばしいせき 市川橋遺跡 (第37次調査)	みやぎけん 宮城県 たがじょうし 多賀城市 いちかわあざごうのい町 市川字鴻ノ池地内	42099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 29秒	20030623 ~	60m ²	個人住宅建設
いちかわばしいせき 市川橋遺跡 (第38次調査)	みやぎけん 宮城県 たがじょうし 多賀城市 いちかわあざごうのい町 市川字鴻ノ池地内	42099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 28秒	20030624 ~	24m ²	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市川橋遺跡 (第34次調査)	古代都市	奈良 平安	掘立柱建物跡、 小溝群	土師器、須恵器、須惠 系土器、瓦	
市川橋遺跡 (第35次調査)	古代都市	奈良 平安	河川	土師器、須恵器、瓦	
市川橋遺跡 (第37次調査)	古代都市	奈良 平安	南北大路、 溝跡、土壤、 河川、小溝群	土師器、須恵器、須惠 系土器、瓦、木製品 (木簡、皿)、鉄製品 (刀子)	
市川橋遺跡 (第38次調査)	古代都市	奈良 平安	河川	土師器、須恵器、瓦、 木製品(木簡状木製 品、賣串、糸巻、漆 器)、金属製品(鎌 具)	

多賀城市文化財調査報告書第74集

市川橋遺跡

—第34・35・37・38次調査報告書—

平成16年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022) 368-1141

印刷 富士印刷有限公司
宮城県多賀城市笠神五丁目15-28
電話 (022) 367-0157
